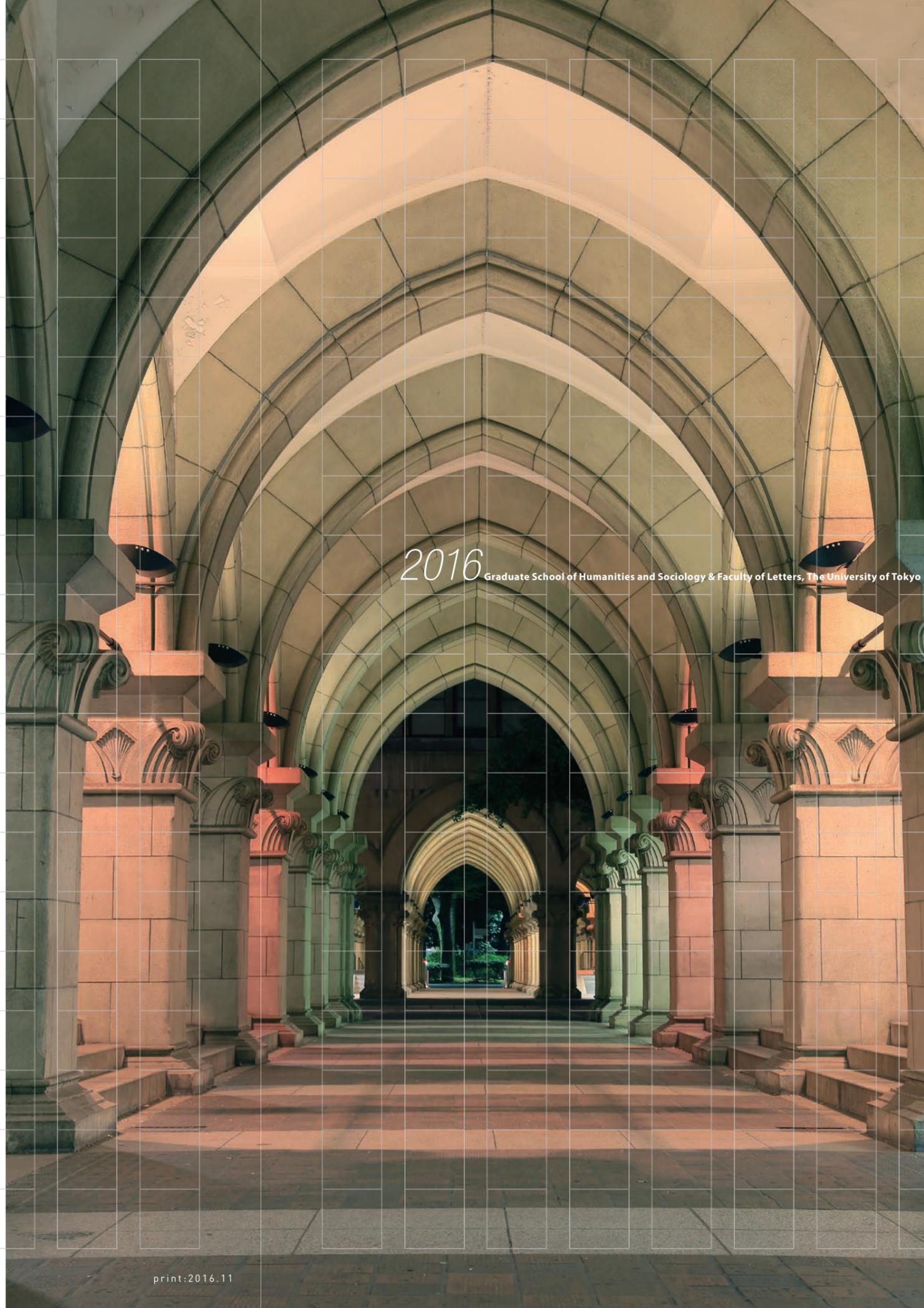


東京大学 文学部

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部

2016

Graduate School of Humanities and Sociology & Faculty of Letters, The University of Tokyo



東大文

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部
Graduate School of Humanities and Sociology & Faculty of Letters, The University of Tokyo

文学部への誘い

ひとは生まれ、与えられた時のあいだを生き、やがて年老いて、たとえば病をえて、この世界から立ちさってゆきます。ひとはみなかざられた時の幅のなかで生を紡いでいる。その意味で人間とは、なによりも時間的な有限性に取りつかれた存在です。

人間はまただれであれ、現在に生きるしかすべがない存在です。いま・ここ以外に、ひとの生きる場所はほかにない。べつの場所を夢みることがあったとしても、ひとがそれを手にすることはありません。それでは人間はただ一定の時間のうちに封じこめられ、現在のただなかに囚われているだけの存在なのでしょう。

たとえば、こんなことを考えてみましょう。素数が無限に存在することは、古くから知られていました。ユークリッドの『原論』のなかに、美しい証明が見られます。その証明に私たちはいま・ここでふれることができる。これはそれだけでも、信じられないくらい素晴らしいことではないでしょうか。私たちひとりひとりが、じぶんに与えられた現在において、時の流れを超えたなにごとかにふれているのです。

文学部は現在、人文学科一学科制を取っていますが、文学部には大卒で歴史的に顧みれば、思想系統、歴史系統、言語・文学系統、心理・社会系統の四つの分野がふくまれています。そのそれぞれはいずれも置き換えのきかないこの現在と、「いま・ここ」という限定された時空を超えたものとの両者にかかわっています。もちろんそのかわりかたはさまざまで、現在とそれを超越したもののどちらに主要な関心を懐くかによって、彩りもことなっていくことになります。

変わることがないのは、いま・ここで、現在を超えるものとかかわろうとする姿勢です。古いテキストにふれるとき私たちは、いま・ここを超えてようとしています。現在にはぞくしていないテキストを織りあげ、受けついできた者たちが、時のかなたから私たちに呼びかけてくるからです。いま・ここで問われているさまざまな問題をたとえば人間の行動という観点から根本的に考えようとする場合にも、私たちは現在を越える視点を必要とします。目のまえにひろがる現実のただなかに埋もれているかぎりでは、現代のすがたについてすら、それを充分にとらえることができないからです。

永遠とはなんなのか、ほんとうはだれも知ってはいません。ただ人間はむかしから、時間を無限に延長することではなく、現在に対していわば垂直に立ちつづけることを、永遠の似像と考えてきました。文学部の学問はすべて、過去からの語りかけを聞きとり、未来への兆候に身を開こうとするものです。しかもいま・ここにおいて耳をすませ、目を見ひらこうとする営みなのです。その意味で、文学部の学問とは、時間的な存在である人間が時の流れを超えて、永遠を垣間見ようとする試みにほかなりません。時間にぞくする存在である人間が、しかし時間を超えようとする、この魅力的な営みに参加してみませんか。



第52代文学部長
熊野 純彦

人文知の ただなかへ

文学部とは「文学」を学ぶ学部だというイメージがひょっとしたらあるかもしれませんが、狭義の文学研究もちろん活発に行われていますが、むしろ「文」を学ぶ学部、「文」についての学問をするところだととらえていただくほうがいいでしょう。「文」とはつまり「テキスト」であり、人間の言葉が織りなすすべて、社会や文化が生み出すあらゆる現象が対象となります。つまり文学部での教育・研究は、多分野を横断して広がり、人間の存在と言語、社会の伝統と未来を読み解こうとします。書物の深い森に分け入り、資料の大海原に漕ぎ出して、「我々はどこから来たのか、我々は何者か」を考えるとともに、「我々はどこへ行くのか」を思い描く。それが文学部の根幹をなす姿勢です。そうやって築かれていく「人文知」は、今を生きるだれにでも開かれ、自由に伸び広がっていく悦ばしい知なのです。

専門研究と 越境性

文学部は従来の四学科を「人文学科」に統合し、一学科制のもとに新たな態勢を整えました。これにより、人文知を総合的に探究する場としての性格がますます強化されています。同時に、27の専修課程からなる、きわめて専門分化した研究の場である点も、文学部の特徴であり続けます。それぞれの専門研究を徹底的に掘り下げ、重厚な学識の蓄積に新たなページを加えていくことは文学部の使命であり、誇りでもあります。文学部に進学する学生は、それら専修課程のいずれかに属して、歴史ある学問の奥行き深さを自ら体験するとともに、そこで日々、新たな挑戦がなされていると感じ取ることができるでしょう。もちろん、各自の興味や必要に応じて、所属する専修課程以外の授業に参加し、複数の領域にまたがる形で学ぶことも可能です。深く専門に沈潜するにせよ、越境的な知の冒険を企てるにせよ、文学部はそのための最善の環境を学生に提供します。

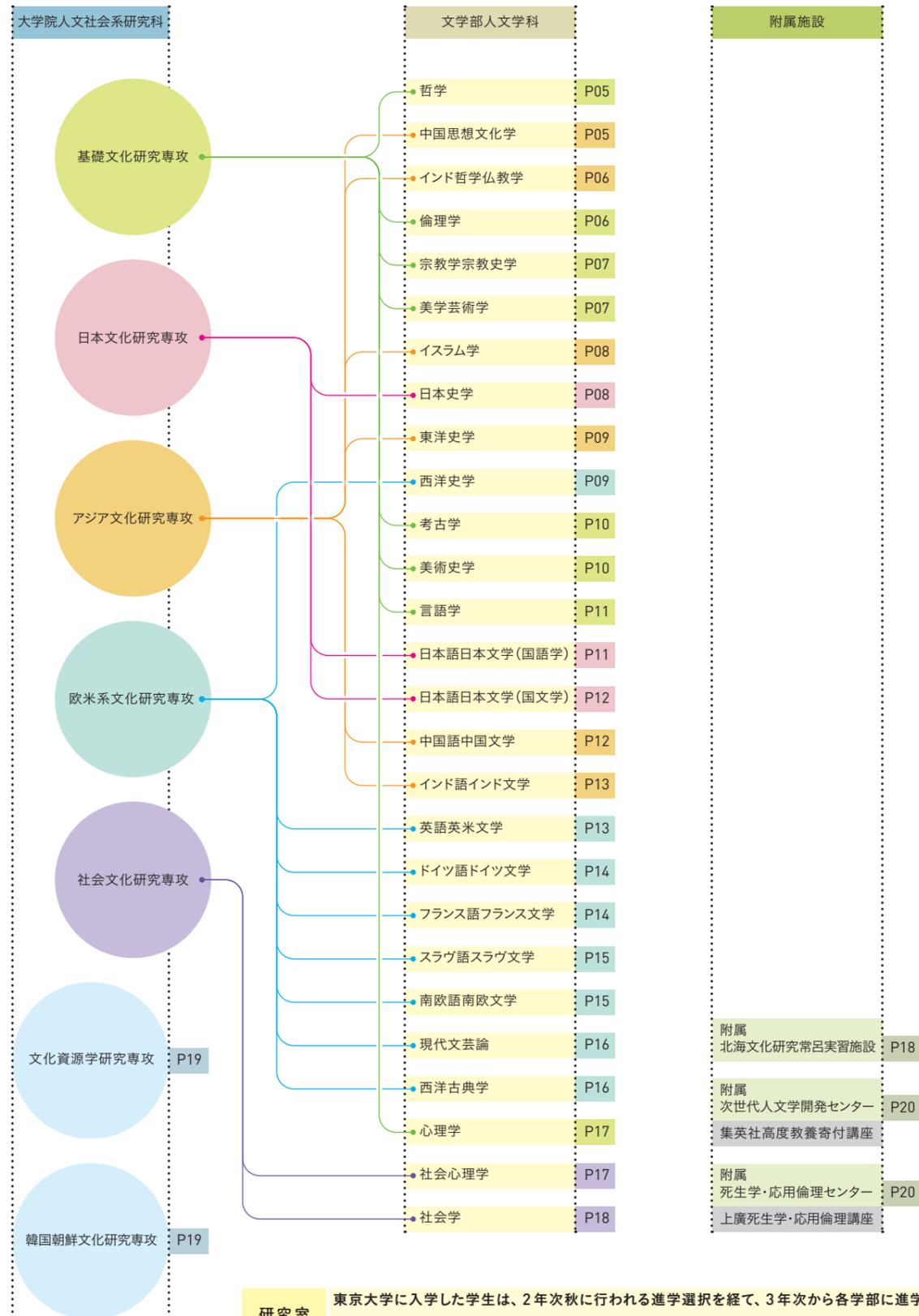
研究室の 一員として

文学部の授業には、大人数のいわゆる「マスプロ」型の講義はほとんどありません。少人数で、教員との緊密なやりとりをとおして学ぶスタイルが伝統的につらぬかれています。人文知のあるべき姿を、教員が学生に直接伝授していくやり方だといえるでしょう。同時に、文学部の教育は教室の中でのみなされるものではありません。学生のみなさんは、それぞれが所属する専修課程の研究室を自らの本拠地として、卒業までを過ごすことになります。同じ学問を志した先輩や仲間たちとの交流はかけがえのない経験となるでしょう。また、文学部図書室にはきわめて豊かな蔵書があり、さらに各研究室には代々蓄えられてきた多くの貴重な書籍や資料があります。学生のみなさんは、自分が文学部の長きにわたる歴史を受けつぐ一員であることを意識しながら学ぶことができるのです。

INDEX

文学部への誘い	02
研究室・附属施設紹介	04
大学院人文社会系研究科・文学部組織図	04
専修課程	
哲学	05
中国思想文化学	05
インド哲学仏教学	06
倫理学	06
宗教学宗教学	07
美学芸術学	07
イスラム学	08
日本史学	08
東洋史学	09
西洋史学	09
考古学	10
美術史学	10
言語学	11
日本語日本文学(国語学)	11
日本語日本文学(国文学)	12
中国語中国文学	12
インド語インド文学	13
英語英米文学	13
ドイツ語ドイツ文学	14
フランス語フランス文学	14
スラヴ語スラヴ文学	15
南欧語南欧文学	15
現代文芸論	16
西洋古典学	16
心理学	17
社会心理学	17
社会学	18
北海文化研究常呂実習施設	18
大学院人文社会系研究科	19
文化資源学研究専攻	19
韓国朝鮮文化研究専攻	19
次世代人文開発センター	20
死生学・応用倫理センター	20
国際交流室・日本語教室	21
堆積した知層の重み(図書室紹介)	22
文学部の軌跡	24
文学部生の1/365	26
文学部生かく学び、かく思う	28
卒業生の航路	30

文学部には、文学をはじめ、哲学、考古学、美術史学、心理学、社会学など27の専修課程（研究室）があり、学生は自分の興味や志望に合わせて進学先を選びます。次ページから、それぞれの研究室がどのようなテーマに取り組んでいるのか？を紹介いたしますので、研究室選びの参考にしてください。



研究室とは？ 東京大学に入学した学生は、2年次秋に行われる進学選択を経て、3年次から各学部に進学します。文学部に進学した学生は、人文学科の各専修課程に所属します。専修課程をベースとして、専門分野ごとに教員、大学院学生と学部学生が作る個別の学問共同体を「研究室」と呼んでいます。各研究室・施設のホームページもご覧ください。▶ <http://www.lu-tokyo.ac.jp/postgraduate/chart.html>

哲学研究室

哲学研究室は、西洋哲学の主に文献研究を通して、哲学することを学び、実践する場です。少し具体的に言えば、プラトン、カント、ウイゲンシュタインといった哲学史上の大きな哲学者の文献読解をもとにしながら、自ら哲学することを学び、最終的には自らの哲学を形成することを目指します。

このように言うと、過去の哲学を学ぶことにはどのような意味があるのか、自ら哲学することを学ぶことが目標であるなら、数百年さらには数千年も前の古びた文献を苦学して読解するよりは、素手で哲学することを目指す方がずっと早いのではないか、という疑問が投げ掛けられるでしょう。どんな学問でも過去の蓄積や遺産を踏まえることが大事であるというのが、通常の答えですが、哲学の場合には異なった事情があります。

人類はどの地域においても神話的思考や「科学」的思考を形成してきましたが、哲学は2600年ほど前に古代ギリシアにおいて一度限り創設された独特な知的活動です。この独特な知的活動は、歴史を通じて廃れることなく、様々な変貌を遂げながら、現在でも文字通り多様な成果を生み出しつつあります。さて、その活動の独特さは、対象によって定まるものではなく一敢えて言えば、哲学はどんな事象をも対象とすることができます一、その活動の内容を一義的に規定することも困難で一例えですが、現代英米の分析哲学と現代フランスのドゥルーズの哲学とを比べた場合に、そのスタイルを含めて共通性を見出すことは難しい一、あれこれの哲学の間に進歩や優劣を決めることもできま



フェノロサ(1853~1908)、1878~1885年の間、本研究室で哲学を講じた。ある演習風景

せん。しかしながら、それらが、神話的思考とも「科学」的思考とも異なる、哲学的としか言いようのない手法のもと、哲学的概念を素材として駆使することによる独特な知的活動であることもまた事実です。

この独特な活動の独特さを身をもって学び、自らもまた哲学することが出来るようになること、これが、まずは哲学研究室における教育の目的です。この目的を実現するためには、出来合いのマニュアルを頼りにするよりは、一優れた絵画を模写したり、優れた演奏をコピーするように一哲学という独特な知的活動を体現した哲学者たちの実践を共にするという仕方、哲学の現場に飛び込むこと、そして、哲学の手法とその素材である哲学的概念を身につけることが何よりも大切です。

その先に、本研究室に身を置き、自ら哲学することを試みて大きな思索を繰り広げた西田幾多郎から坂部恵に至るまでの先達者のように自らの哲学を形成する途が開かれています。幅広い哲学の領域をカバーする私たち教員は、その手助けをしたいと考えています。(卒業後の進路に関しては、学生諸君の努力の賜物ですが、哲学専修卒業という肩書が不利になったという報告は一切受けていない、ということだけ付記します。)

中国思想文化学研究室

中国思想文化学研究室の起源は、1877(明治10)年、東京大学創設とともに文学部に置かれた和漢文学科に遡ります。ですので、当研究室は東京大学と同じく130年を超える長い歴史があります。その後「支那哲学」となり、戦後の1946年以來長く「中国哲学」研究室という名称を名乗ってきましたが、1994年に「中国思想文化学」研究室に変更しました。

皆さんは「中国哲学」という名称からどんなことを想像するでしょうか。多くの方は、『論語』や『孟子』、『老子』や『莊子』などの中国古典を、長く蓄積されてきた注釈史の成果を丹念に踏まえつつ解読する、いささか時代の流れからかけ離れた学問というイメージなどを持っているかもしれません。中国古典は、汲めども尽きない魅力に満ちた人類の重要な知的遺産であり、21世紀に生きるわたしたちが正面から挑戦する価値のあるテキストであると、わたしたちは考えています。しかし一

方、明治以降の近代的な学術手法で得られた新たな情報や知見を踏まえて中国古典に向かい合うとき、中国古典はそれまでと違った表情をわたしたちに示し始めます。わたしたちは、さまざまな学問分野の最新の成果を大胆に吸収しつつ、これまで隠されてきた中国古典の魅力を再発見したいと考えています。そのために、「中国哲学」に替えて「中国思想文化学」という名称を使うことにしたのです。以来、研究対象はたいへん多様化しました。例えば王権論や道教の修行法、文献学、

キリスト教布教史、風水思想などが、近年の教員・学生たちの取り組むテーマです。中国思想文化学研究室は、学問的に意味があると学生が信じる研究テーマであれば、ほぼ全てのテーマの研究が許容され奨励される、とても開かれた研究室であるといえます。

研究室は比較的小規模なので、教員と学生、学生同士の交流は盛んです。またアジア各地からの留学生も多く、共同研究室にいると様々な言語や異国の考え方に接することになります。研究材料となる漢籍文献は至近距離に豊富に備えてあり、利用環境は日本一と言っても過言ではありません。卒業後の進路は大学院進学と就職が半々で、就職を選んだ先輩はアジア各国と深く関わる企業で活躍しています。漢字文化圏に生まれ育ったみなさんが、自分あるいは自分たちの問題を深く考えようとした時、われわれが蓄積してきた知見や、われわれが築いてきた学習環境を是非とも役立てて欲しいと願っています。



共同研究室の様子



『朱子語類』などの所蔵漢籍の一端

インド哲学仏教学研究室

南アジアから東アジア世界にかけて思想的な基調となったインド思想および仏教思想を、さまざまな視点から深く学び、また研究することができます。なんとと言ってもその醍醐味は、文献資料を原語で読むことができるようになることでしょう。また、読めなくても、アジア世界の基調になった思想を、深く知ることができるようになります。

インド思想は基本的に口承で伝えられましたが、やがて文字で書かれるようになりました。古典言語としてサンスクリット語およびパーリ語が存在しますが、それらの言語で書かれた資料の講読を行う演習の授業は、一番、伝統的な学問の雰囲気を持っています。

やがて仏典は、隣の文化圏であったチベットや中国にも伝えられ、チベット語、古典漢語に翻訳されました。さらには東アジア東端の朝鮮半島や日本にも伝わり、その地の人々の基本的な価値観を形成するに至りました。つまりアジア世界のほぼ半分の地域を対象に、しかも古代から現代まで、インド思想と仏教を軸に学ぶことのできる研究室です。

インド哲学仏教学研究室は、歴史的には漢文の仏書講読から始まりました。現在、8つの国立大学にインド哲学仏教を学ぶコースが存在しますが、日本仏教までその中に含まれるのは東京大学だけの特徴です。

さて、アジアの諸地域の文化に影響を与えたインド思想および仏教は、様々な研究領域と関連を持っていますが、本研究室の基本は文献の読解に置かれています。

基本的な思想を正確に理解することが、現代の問題にアプローチする上でも必要不可欠と考えているからです。応用編として周辺の学問領域、そして現代の私たちの抱える問題にも接近することが期待されています。

このように幅広い地域の資料を学びの対象とし、しかも古代から現代まで、かつ基礎から応用までと、多くのことにチャレンジできる可能性が開かれていることが本研究室の魅力です。海外の大学との交流も多く、留学生が多いことも特色の一つでしょう。ちなみにインド・デリー大学との学生交流協定は、東京大学で最初に始まった協定です。

この分野に参入する学生は皆、それぞれが夢を持って学んでいます。学部生と大学院生の風通しの良さも伝統の一つですし、また教員と学生の親睦を深めるために、年に一回の研究室旅行もあります。時には教員を含めた有志による合宿や海外旅行など、青春の一コマと呼べる体験ができることも、その魅力の一つだと思います。



ナーランダーの僧院跡にて、学生、教員、OBも参加



演習の一コマ、教員も学生も和合して…真剣に

倫理学研究室

「倫理学」という学問に、人が抱くイメージや期待は、おそらくさまざまなものでしょう。日常の行為の善悪について研究するという事を思い浮かべる人もあるでしょうし、また、ソクラテスの生に重なるような「よき生」の追求を思い描く人もあるでしょう。自らの人生についての問いを直接重ねようとする人もあるでしょうし、また、今日的な社会問題への積極的な発言を期待する人もあるでしょう。倫理学専修課程に進学してくる学生諸君の思いも、そのようにさまざま多様なものでしょう。

しかし、それが文学部の中で、しかも思想系の学問分野の中での倫理学研究となると、そのあり方も限定されてきます。文学部の学問が原典テキストの精密な読解を身上とするように、倫理学専修課程の学問も、倫理学についての原典テキスト、就中古典のテキストの読解をその基本とすることになります。その点では思想史研究が中心となり、現実的課題との関わりは間接的なものにとどまるでしょう。そのことはしかし、倫理という言葉に対する各人各様の思いを否定するものではありません。むしろ古典の読解にこそ、それぞれの思いが最も豊かな奥行きをもって現実化する場面があるというのが、私たちの確信です。

したがって、倫理学専修課程は、独断と空理空論を控えるという最低限の謙虚さを要求される以外は、きわめて自由な雰囲気になっています。かつてこの研究室の主任教員であった和辻哲郎は、日本近代において特筆すべき倫理学の体系を築き上げましたが、それは、

西洋思想と東洋思想の融合および規範学としての倫理学と事実の学としての諸学の融合を目指したものです。さらに和辻は、倫理学以外に広く人文科学一般の分野でめざましい成果を上げたことで知られていますが、この多様な学問分野に開かれているという性格は、今日でも生きています。学生の研究対象の選択も各人の大幅な自由に任されており、実際、これまでの卒業生の研究テーマも、洋の東西を問わず、また古代から現代に至るまで、非常に多彩です。

倫理学専修課程の講義・演習の対象領域は、西洋の倫理思想と日本のそれとに二大別されます。倫理学がいち早く自覚的な形態をとった西洋の思想伝統を学ぶことは、日本倫理思想史を専攻しようとする学生にとっても欠かすことはできません。一方、西洋の倫理学に関心を持つ者にとっても、自らが背負う伝統との対話は必要です。相異なる領域への幅広い目配りが求められるのが当専修課程の特色です。



演習室の風景



研究室の風景

宗教学宗教学史学研究室

「宗教」と聞くと、過剰に警戒する人もいれば好奇心を刺激される人もいますが、そのどちらもが多くの場合、宗教に関して何らかの先入観を持っています。宗教学の教育は、何よりも「宗教」という言葉自体に対して皆さんが知らず知らずのうちに抱えている思い込みを揺り動かすことから始まります。その共通のスタート地点から、具体的に何を研究していくかは、一人ひとりの興味関心によってさまざまに分かれます。日々ニュースとして飛び込んでくる、宗教をめぐる国際情勢や時事問題を分析しようとする学生もいれば、古代や中世に書かれた宗教書をじっくり読もうという学生もいます。地方の祭りや寺社の調査に赴く学生もいれば、同年代の若者の宗教意識をインタビューから探ろうという学生もいます。それぞれの発見を持ち寄るのがこの研究室という場です。学生の多くは、宗教学に進学するまで、宗教について特別に関心があったわけではないという人々です。それでも卒業する時までに身につけているのは、宗教の歴史や文化に関する知識は言うまでもなく、現実に即した、なおかつ多角的な宗教の見かたです。それはよく耳にする「宗教は根本ではみな同じだ」や「一神教と多神教は文化が正反対だ」といった単純化ではない、リアリティに迫るための宗教比較の視点です。そのような見かたができる人を一人でも多く社会に出していくことがこの研究室の役割です。

キリスト教や仏教などの宗教系の大学を除くと宗教

の研究に特化した学科やコースを設置している大学は少なく、また、あらゆる宗教を多様な方法を用い総合的に研究することを謳っているところはさらに稀です。それを可能にしているのは、1905年以降の伝統、多彩な専門をもつ教員陣、全国随一の宗教学関連書籍の蔵書量です。仏教学、イスラム学の研究室が隣接していることも大きな強みです。1958年に国際宗教学会の世界大会を非西洋諸国で初めて開催したのですが、その時の事務局の中心は本研究室。海外からの学者のために企画した、「おもてなし」精神たっぷりの宗教施設ツアーのしおりなどが残っています。以来、国際交流も盛んです。

半世紀前、研究室の教員の一人、柳川啓一は、「宗教学はゲリラである」と宣言して周囲を驚かせました。細かい作法（専門分野=ディシプリン固有の方法の手続き）に縛られず、権威を笠に着ることなく、知的刺激を求めて突き進むという気風は今も生きています。



毎年春の研究室旅行では関東近辺の宗教施設を回ります。幹事が丁寧なしおりを作る伝統は今も健在。



奄美群島 徳之島での調査実習。現地の高校にて

美学芸術学研究室

「美学芸術学研究室」という名前をきいたとき、どんな所を想像しますか？「芸術大好き」の人々が集まって楽しく議論しているような場所を思い浮かべる人もいるかもしれません。いやいや、「美学」は美についての哲学であって、愛好家的なアプローチとは全くちがうものだ、厳めしい顔で普通の人にはわからない難しい話をしているにちがいない、などと思う人もいるかもしれません。この二つの一見正反対のイメージは、どちらも当たっていると言えば当たっているのですが、いささか一面的です。それらは別々のことではなく表裏一体であり、両方が合わさって力を発揮すると私たちは考えています。

芸術なんて趣味なのだから、そんな難しい顔をせずに楽しめばいいじゃないか、と思う人もいるかもしれません。もちろんそれはそれで一つの考えなのですが、「美」にしる「芸術」にしる、最初から所与のものとしてそこにあるわけではありません。それ自体が様々な文化的・歴史的コンテクストと関わりながら成り立ってきたものなので、われわれがあるものを芸術作品として認識するとか、何かを美しいと感じるという、一見単純な事態のうちすでに、様々な歴史が刻み込まれていたり、文化的な力が作用していたりするので。そのあたりを掘り下げてゆくことで、芸術体験の背後には思いもかけなかったような大きな世界が開けてきて、新たな楽しみ方を付け加えてくれるのです。こんな魅力的な体験を放っておく手はないと思いませんか？

最近、美学や芸術学の周辺で盛り上がっている話題のひとつに、「感性学」や「感性文化」というテーマがあります。美や芸術という、これ



この写真には、美学や芸術学に関わるテーマがいくつも隠されています。探してみてください。

までは暗黙のうちに、美術館で絵画作品を鑑賞するようなモデルを想定して考えていたところがあるのですが、それは人間の感性に関わる文化の中の氷山の一角にすぎず、その地続きのところには、もっと多様で広範な事象が広がっています。最近のメディアやテクノロジーの新たな展開をうけて、その広がりはずっと増えています。そうした「感性文化」の歴史や思想という大きなコンテクストの中に置き直してみると、美や芸術をめぐる問題もまた新たな光を放ち始めています。美や芸術は、決して一部の愛好家だけのものではありません。それらは、「感性」という窓口を通して、人間とは何か、文化とは何かといった根源的な問題へとわれわれを誘ってくれるものにほかならないと、私たちは信じています。

イスラム学研究室

イスラム学研究室は、1982年に開設されました。当時、石油関係を端緒として中東に対する関心が高まっており、これからはイスラムに対する理解も重要になるが、ついでにはイスラム世界の現状を理解するだけでなく、もっと根源的なところからイスラム理解を深化させようというのがその開設の趣旨でした。

それでは本研究室では具体的に何をどのように研究しているのかといえば、それはクルアーン(コーラン)を中心として、預言者伝承学、法学、アラビア語学、神学、哲学などを、主としてイスラム草創期(7世紀)から現代までに蓄積されてきた文献に拠りながら、理解することです。このように言うと、辞書と首っ引きで古色蒼然とした文献を眺める作業と思われるかもしれませんが、このような印象は正しいともいえるのですが、研究の当事者としてはもう少し言葉を補って説明しておきたいところです。

イスラム学に限ったことではありませんが、すべての文献学は、文献を正確に理解することに始まり、正確に理解することに終わると思います。例えば、クルアーンには意味の不明な章句が数多くあります。しかしそれを語った本人(神なのかムハンマドなのかは措きます)やそれを聞いた人たちはその意味が分かっていたはずで、研究者は、注釈書を初めとして、同時代あるいは後世の資料(場合によっては考古学資料なども含まれるかもしれませんが)を駆使してその本来の意味を確定しようと努力します。しかし考えてみると、この過程は、その章句に関

わるあらゆる資料を理解し、それらを矛盾のない体系として再構成することに他なりません。ある章句を理解するということは、その章句を理解することに始まりながら、実はその章句をめぐるあらゆる文脈(文化的・自然的・経済的等々)を総合的に理解することです。例えて言うならば、自然科学においてあらゆる観測データ・実験データ(大前提としてそれが正しいデータであることが必要ですが)を説明する理論を探求する作業と基本的には同じだということができるでしょう。

本研究室の資料の一部を写真(左)に収めました。ここに見えているのは、アラビア語による、預言者ムハンマドの伝承集やその注釈です。ここに収録された預言者の言行についての記録の一つ一つが、イスラム期以前からの何千年という伝統をその背景にもっています。ここから何を読み取り、その理解に何を付け加えていくか、イスラム学研究室ではそのような作業を行っています。



研究室所蔵の書籍



研究室で開催した高校生向けの模擬授業(2015年8月7日撮影)

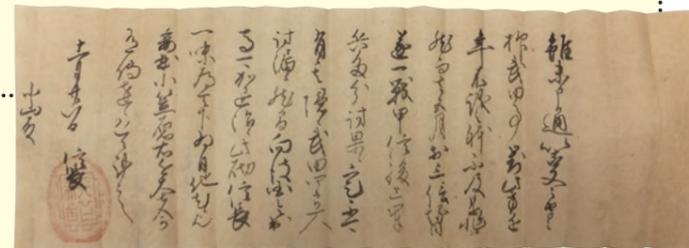
日本史学研究室

日本史学研究室は、毎年25人近い進学生を迎え入れ、大学院生等を合すると100人ほどの学生が所属する大所帯です。法文2号館1階にある研究室には、常にスタッフ、学生が来ていて、賑わっています。

授業の中心は時代ごとのゼミ(演習)で、学生はそれぞれ2~3個のゼミに出ています。ゼミでは、学生一人ひとりによる史料読解や研究報告、それに関する議論を中心に、先輩のアドバイスを受けながら、歴史学の基礎を身につけていきます。先輩から後輩へのつながりのなかで「口伝」されていく知識や経験も多くあります。見学旅行やゼミ旅行、史料調査など、実際に現地に行って実物にふれる機会も多く、古文書を読む会や読書会など自主的な勉強会も盛んに行われ、学生相互の交流も活発です。

本専修を修了するには、400字詰原稿用紙換算で本文100枚(以内、それに近い分量)の卒業論文の提出を求めています。これが学修の一つの最終目標になります。自分なりの問題関心に従って自由にテーマを立てることができますが、歴史上のことは直接に見たり聞いたりすることができませんので、先学の成果に学びながら、現地へ行くなどして多種多様な史料を探し出し、一から自分で確かめてみる必要があります。多くの史料を読み解いて、問題を設定し、論理の構成を考えて分かりやすく叙述するという一連の営みは、人生でおそらく最初の経験であり、その後の大きな財産になるでしょう。学問の醍醐味も存分に味わえることでしょう。

さて、日本は、世界の諸地域のなかでも比較的、多くの文献史料を



【織田信長朱印状(研究室所蔵)】
下野の小山氏宛て。
天正3年(1575)、長篠の合戦での勝利を喧伝したもの。



学生部屋のようす

残している方だと言われています。また、日本で日本史を研究する場合、多くの一次史料をすぐに手に取って読むことができるというメリットがあります。なかでも伝統のある本学は、史料編纂所を擁するなど、日本史を学ぶ上で世界最高と言ってよい環境にあり、それを活かして、学部生や修士課程の学生でも、テーマによっては、第一線のオリジナルな研究成果をあげることができます。

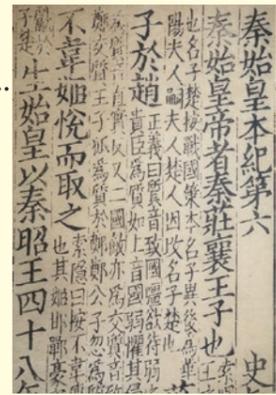
グローバル化とIT化が急激に進み、社会も歴史学も大きく変わってきていますが、だからこそ、人類が築き上げてきた知識の伝統や達成を踏まえつつ、それを根底から革新しつづけることができる柔軟な知性がいっそう強く求められています。本研究室は、そういう意欲にあふれる皆さんを、心から歓迎します。

東洋史学研究室

東洋史学(アジア史)のおもしろさ、それはアジア社会がもつヴァイタリティー、それと表裏の急激な社会変化、そして今後の世界を変えていく可能性です。アジアの魅力は、アジア社会に一步でも足を踏み入れたものならば、だれでも感じることはできるはずで、喧騒と色彩と匂いのある街路、水と光と草原と雪と日差しの極限から極限までのスペクトル、伝統と現代との整理のつかない混雑…。そのいずれもが、人をアジア社会に引き寄せ、好奇心をあおり、不安感を増幅させ、そして知的冒険心を掻き立てるのです。

東洋史学が対象とするこのようなアジア社会は、落ち着き安定したヨーロッパ社会とは異質なものです。したがって、その社会へのアプローチも定まったものがあるわけではありません。それゆえに私たちは、まずアジア社会の中に入り、体験を積み、アジアを見る目を養っていくことを実践しています。

私たちが研究対象としているのは、激しい変化の中にある現代のアジアだけではなく、「史記の世界」から「コーランの世界」にいたるまで、多様な文明世界の、古代から現代にいたる歴史が含まれています。東アジア文明の担い手となった中国・朝鮮、いくつもの騎馬民族国家が興亡した内陸アジア、仏教・ヒンドゥー・イスラーム文化が入り組む南アジア・東南アジア、そして古代オリент文明とイスラーム文明が交錯する西アジア、さらに地中海・イスラーム文明と緊密な交渉を保ってきた北アフリカ・イベリア半島…。これらの地域は約五千年にわたる長い歴史を持ち、膨大な人口と広大な領域を有していま



司馬遷『史記』の始皇帝本紀(明王朝時代の版本)



サーサーン朝期のレリーフの前に立つ教師と生徒たち

す。この地域に生きる人々の生活と文化を知ることは、世界を理解することはできないはずで、

東洋史学研究室の学習を通じて皆さんは、歴史学にはさまざまな方法があり、さまざまなものの見方があるのだ、ということに気づくはずで、新鮮な感覚とたくましい意欲をもって、アジアに対する自分の個人的なアプローチを生みだしてほしいと思います。

学生時代は、受け身の学習から抜け出し、研究上で自らの問題を見つけだすとともに、これからの長い人生についての重要な選択を迫られる大切な時期でもあります。コーチ役・助言者としての教授や助教、先輩や同級生の集まる研究室での率直な交流は、みなさんにとって大きな刺激となるでしょう。研究室にはアジア各地からの留学生も少なくありません。ここを世界に踏み出すための学生生活の拠点にしたいと思います。

西洋史学研究室

グローバル化の波にさらされ、変化し続ける現代社会において、近視眼的に将来を予測しようとする現状分析はもはや有効な指針とはなりえないでしょう。世界的視野で過去から現在までを複眼的に見通す歴史学の視点こそ、錯綜する情報を的確に選り分け、長期的展望に立った判断を可能にするものです。私たちの目指す歴史学研究とは、悠久の時の流れの中に揺るぎない視座を確保する営みに他なりません。

西洋史学専修課程における研究と教育は、時代的には古代から現代まで、地理的にはヨーロッパを中心としながら、南北アメリカやアジア・アフリカとの関係をも射程におさめるものです。教員は、各分野を代表する研究者であり、授業は、教員各々の専門研究にもとづいた講義と、学生が教員とともに史料や文献を講読し、自らの研究発表をおこなう演習(ゼミ)からなります。学生の研鑽は最終的に「卒業論文」にまとめられますが、教員による指導はもちろんのこと、博士課程の大学院生が主催するサブゼミも開催され、最新の知識や方法論について助言できる体制が整っています。学生のみなさんは、教員や大学院生と接しながら、主体的に自らの学習、研究に取り組むことができるでしょう。

西洋史学専修課程は、文学部屈指の大所帯です。在籍する学生の数は、大学院生をふくめて合計で100名近くになります。大学院生の存在感が大きいこともこの専修課程の特色で、そのため助言を与えてくれる先輩には事欠きません(ただし、常に10名前後の大学院生がヨーロッパ各地に留学しています)。

西洋史学研究室は、法文二号館一階にあります。基本的に入出入り

自由で、入口近くには新着雑誌の棚があり、奥の談話室には、参考図書が配架されています。西洋史学の対象範囲の広さを反映して、英・独・仏はもちろん露・西・羅・伊・希など、西洋諸言語の図書が四方の壁を埋めています。研究室の雰囲気を一言で表すならば、古典的リベラリズムということになるでしょう。ここでは他人の邪魔をせず結果に自ら責任を負う限り、最大限の自由が与えられます。

それと並んで、教員、大学院生、学部生のあいだの権威主義的でない、いわばフラットな人間関係も研究室の重要な伝統です。年一回の研究旅行は、教員や大学院生と個人的に話ができる良い機会となっています。このほかにも、進学者歓迎会や卒業祝賀会が開かれ、さらに、ゼミごとに交流会が開かれるなど、学生間の交流が盛んなことも、当専修課程の特色です。



研究室新着雑誌



ギリシャ、サントリーニ島

考古学研究室

皆さんは、考古学といえば、どのような学問だと考えるでしょうか。「大昔のことを研究する学問」、「発掘をする学問」といった答えが多いかもしれません。しかし、その答えは半分は当たっていますが、完全ではありません。これなら正解だと言えるのは、「考古学は、文字で記録されなかった歴史を「物」を通して明らかにする学問である」ということです。そして、その研究対象となる「物」を得るために行うのが発掘です。このため、考古学の研究は自ずと文字による記録が残る前か、あまり残らない時代が主となります。考古学が大昔のことを研究する学問だという印象は、そこから生まれるのでしょう。しかし実は、文字がある時代でも、使っていた物や庶民の生活のような文献記録に残らない部分は意外と多く、そのような部分について、考古学の研究は知られざる歴史を明らかにしています。このように、考古学は、人類が道具を使い始めてから現在にいたるまでの人類の歴史全体を、あらゆる手法を駆使しながら「物」を通して研究する学問なのです。

考古学研究室は中国大陸を舞台とした戦前の東洋考古学から始まっています。文学部に考古学専攻が設置されたのは終戦直後の1946年で、学生が学び始めたのは翌年のことです。東洋考古学の伝統はその後も引き継がれ、歴代の教員や学生には東アジアを主とする外国の考古学を研究する者が多く、大陸との関係を考えながら北海道に関して行う研究が盛んであることも、その流れの中にあります。一方最近では日本の旧石器、縄文、弥生時代などを研究する者が多く、自然科学的分析を積極的に取り入れた学際研究も活発です。



戦前から収集されてきた日本と海外の考古資料を展示する考古列品室

考古学研究室に入ると、学部時代には、まず基本的な分析方法と発掘の技術を学び、その後、実習に参加することになります。文学部には北海道北見市常呂町に実習施設があり、毎年そこで教員と学生が共同生活を送り、発掘調査を実施しています。こうして基本を身につけ、卒業論文執筆に取り組むことになります。卒論のテーマとしては、日本のほか、朝鮮半島や中国、シベリア、西アジアといった外国を研究する学生が比較的多いことが本研究室の特徴です。学部卒業後、大学院でさらに研究を深める場合も、最近では日本国内での調査研究のほか、海外調査や留学の機会も飛躍的に増加しており、以前と比べて恵まれた研究環境にあります。このように地域、時代ともに多様な研究テーマに挑んでいる考古学研究室の教員、先輩との切磋琢磨は、あなた自身の研究にとっても大きな刺激になるでしょう。

美術史学研究室

研究室の名前は、「美術史」という「学」なのですが、これは「美術」と「史学」に分けることもできますね。つまり、ここは基本的には美術が好きだという人たちが集まって、好きだけでなく研究もしてしまおうというところなのですけれど、方法としては歴史学の立場を取ろうというわけです。

建築、絵画、版画、写真、彫刻、工芸品、さまざまなデザイン——あなたも見たら何か感想を持ちますよね。好きだとか嫌いだとか、ここがいかにかうだったらもっとよかったとか。だいじなことです。研究の出発点にあるのは、何かのイメージに触れて心動かされた体験です。でも、次にするのは、自分がどう感じるかを巧みに語ることではないのです。相手の立場に立ってものを考える、というのが歴史学ですから。

自分の見たものがどんな形をしていて、どんな素材や技法で作られているのか、どこに特徴があるのかを細かく観察します。そして、いかなる力が働いてそういうイメージを形成したのか、調べられることは全部調べて、あらゆる可能性を検討します。また、そうやってできあがったものが社会にどう受け入れられたかとか、それに刺激されて、別のものが作られたといった現象にも注意を払います。

歴史が美術を作り出すとともに、美術もまた歴史を作り出すのです。その両方の意味での〈イメージの歴史学〉を、ここでは探究しています。若い人は自分がいちばんだいじだから、相手の立場で考えるのはなかなかむづかしいかもしれませんね。若者は観念的でもありますから、具体的なことをだいじにする学問を敬遠する向きもあるかもしれません。



2016年の見学旅行の折に兵庫県の大乗寺の襖絵を見る学生たち



卒業生には美術館・博物館で学芸員として働く人も数多くいます。そのひとりが担当した展覧会「マネとモダン・パリ」(三菱一号館美術館、2010年)のカタログ。

それに、美術史というとても特殊な専門領域のような気がするかもしれませんが、でも、イメージの歴史学がおもしろくないはずはありませんし、そんな狭い世界のわけがありません。

美術といってもヨーロッパばかりでなく、日本、中国、イスラームを専門とする教員や学生も、ここにはいます。扱う時代も古代から現代まで。ある意味で、これほど奥行きが広い学問もそうないと思います。

講義と演習を通じて、基本的な研究文献や史料をきちんと読む訓練ができるとともに、美術史研究の先端がどんなことになっているのかに触れることもできます。しかし、何より重要なのは物を見ること。研究室では毎年、たいていは数日の関西見学旅行をしています。東北、九州、台北、北京、韓国に出かけたこともありました。旅行嫌いという人には、向いていない学問かもしれません。

言語学研究室

言語学研究室は、明治19(1886)年に帝国大学の文科大学に「博言学科」として開設されました。明治33(1900)年には「言語学科」と改称し、現在に続いています。代々の教授は、日本語や琉球語の方言、アイヌ語、朝鮮半島、ヴェトナム、台湾、ユーラシア、アフリカの諸言語の現地調査に基づく研究、インド・ヨーロッパ語比較言語学など文献に遺された言語の研究、意味論などの理論研究を行ってきました。琉球語研究に先鞭をつけた初代教授のバジル・ホール・チェンバレン、アイヌ語とユーカラを研究した金田一京助、印欧比較言語学の高津春繁、音声学の服部四郎など、言語の様々な分野に亘ります。研究室所蔵の資料としては、小倉進平教授が収集した、十五世紀以降の朝鮮書籍から成る小倉文庫が知られます。

現在の言語学研究室は教授2名、准教授、専任講師、助教各1名の教員を擁し、例年十数名の学部進学者と、数名の大学院進学者がいます。授業の大半は少人数で、六階の見晴らしのよい演習室で行われます。同じ階に学生室があり、学生は同級生と発表の打ち合わせをしたり、授業の合間にお茶を飲んで一休みしたり、壁を埋め尽くす諸言語の辞書で黙々と自習したりと、さまざまに利用しています。教員の研究室も隣接しているので、頻りに顔を合わせます。授業の中には『認知文法』『談話分析』などの各分野や『使役』『アスペクト』『言語接触』といった特定のテーマについて学ぶもの、『ヒットイト語』『アイヌ語』のように言語を学びテキストを読解するもの、『演習』と呼ばれるゼミ形式の授業などがあります。



代々の先生方が見守る教室



授業ではいろいろな言語を学びます

当研究室で扱う分野は、音韻、音声、統語法、形態論、意味論、比較言語学(歴史言語学)、社会言語学、コーパス研究、手話研究、フィールド言語学、古代言語の解読などです。言語学と聞くと、外国語マニアばかりの研究室を想像されるかも知れませんが、特別な能力は必要とせず、ゼロから言語学を学ぶことができます。学生は、教員の専門分野に縛られず自由にテーマを選ぶ伝統があり、卒業論文では実験をする人、留学生などから言語調査をする人、地方を旅して消滅しそうな方言を調査する人、インターネットでの新語を研究する人など様々です。テーマが決まるまでは全教員から指導を受けてアイデアを磨いていきます。学部卒業生のおよそ三分の一が大学院に進学して研究を続け、半数以上は一般企業や官公庁に就職します。

日本語日本文学(国語学)研究室

国語研究室では、その名の通り国語、つまり日本語の研究を行っています。日本語の研究はまず大きく現代語研究と歴史的研究とに分かれ、その上で音韻・表記・語彙・文法・文体・方言などのジャンルに分かれます。

【現代語】例えば壁に掛かった時計が止まっているのに気付いたとき、「あ、時計が止まっている!!」とか「あ、時計止まっている!!」と言うことはできますが、「あ、時計は止まっている!!」とは言いません。ところが、「時計」に「あの」を付けてみますと、「あ、あの時計止まっている!!」のように、「は」も「が」も使えなくなってしまいます。どうしてなのでしょう?日本人は、無意識に日本語を使いこなしてしまうのですが、実はそれは「日本語の仕組みを知っている」ことを必ずしも意味しません。このような私たちが使っている日本語が持つ、私たちの知らない仕組みやルールについて、現代語研究は扱います。

【歴史】中学高校で習う「古文」は日本語の歴史的な姿の一面で、平安時代中頃の日本語が基盤になっています。それが鎌倉・室町・江戸・明治大正と、時代を経て徐々に変化していった結果が、私たちが現在使っている日本語なのです。また奈良時代以前にも文字資料が残っておりその姿を窺うことができます。私たちが直に知らない時代の言葉の姿を探ること自体も興味深いですが、日本語がいかにして現在の姿になったか(一例を挙げれば、何故八行にだけ「半濁音」があるのか?)を考えるため

にも歴史的研究は欠かせません。

本研究室の学生たちはまず概論を受講して全体的な基礎知識を身に付けた上で、より専門的な講義や演習に参加して研究能力を高めます。本研究室には現在四名の教員がおり、指導面で学生の幅広い関心に応えられるよう努めています。

国語研究室には、日本語に関する研究書や、上代～近代に至る様々な史料の複製・翻刻などが大量に配架されていますが、それだけでなく平安時代から江戸・明治時代までに書写・出版された貴重な書物の現物も、大学機関としては日本有数の規模で備えています。一方近年では日本語学の研究においてもCD-ROMやWeb上のデータベース等がどんどん活用されるようになってきました。そこで本研究室では、学生たちが右に江戸時代の板本を置き、左にはパソコンやタブレットを置いて調査・研究に勤しむといった風景が日常的に見られます。



研究室での演習中の風景



夏休みの大学院生旅行にて

日本語日本文学(国文学)研究室

国文学研究では、日本の古代から近現代までの様々な文献を「読む」ことが基本です。言葉を読んで文脈を理解し、その背後にある人々の営みに想像を馳せる、心理を推察する、その時代の文化を理解するなどが課題です。時には歴史や思想や宗教、歌謡・能・歌舞伎・近代演劇などの芸能、絵巻や絵画などにまで研究対象が広がることもあります。

高校までの学習では問題に対して正解が一つであったのに対して、大学での研究には唯一無二の正解はありません。優れた見解であれば数十年にわたる通説が覆され、新たな説が支持されることもあり得ます。それは高校までの「国語」では経験し切れなかった、大学での「文学研究」の醍醐味です。そのためには活字になる前の姿である写本や版本や作家の草稿から辿り直す場合もあります。国文学研究室には文化財とも言えるレベルの数百年前の写本や版本が所蔵されています。これらに直に触れて、活字の文献からは読み取れない情報を探るのも一つの方法です。そのほか文学を批評するための多様な方法論を学ぶこともできます。肉、刺身、野菜に違った包丁を使うことで素材のうま味が生きるように、分析対象にふさわしい批評の方法を用いるのです。そして自らの目で確かめて事の真偽を判断し、思考をめぐらして論理を組み立て、新しい見解を提案していきます。

国文学研究室には、上代・中古・中世・近世・近現代の時代ごとに研究教育を担当する教員と時代を超えて特定のジャンルを担当する教員がいます。演習(ゼミ)

は各教員が担当、学生たちが課題のために多様な本文・注釈・研究書などを読み比べて諸説の妥当性を吟味して研究発表し、仲間たちと議論します。卒業論文は学生各自が自由にテーマを決め、教員の助言を得ながら自主的に進めます。大学院生による研究指導もありますし、世界各国からの留学生との交流などの機会も豊富ですから、おのずから学ぶことも多いでしょう。

卒業生は大学院に進学して研究の専門家を目指す人も多い一方、公務員・民間企業・マスコミ・出版社・中高の国語教員など多様な分野に巣立ちます。国文学専修課程で鍛えた文章を読む力、書く力、文献批判や口頭発表や議論の力は、いかなる分野の社会人にとってもほんとうの意味での実力となるということは、多くの卒業生が語っているところです。

国文学研究を通して私たちと一緒に、知性と感性を磨いてみようではありませんか。



演習風景



研究室旅行

インド語インド文学研究室

本研究室では、インド亜大陸の言語と文化について、サンスクリット語などの古典語によって伝えられている文献を中心に研究しています。研究室名に冠されている「インド語」と「インド文学」は、日本語でいうとやや誤解をうむかもしれません。英名の Indian languages and literature のほうが実態を正確に表しています。

まず、インド語という単独の言語はありません。本研究室では、インド亜大陸で用いられている、あるいは用いられてきた諸言語をインド語(インド諸語、Indian languages)と総称しています。サンスクリット語をはじめとする多くのインド諸語は、ヨーロッパの多くの言語と同一の起源をもち、インドからヨーロッパに至る広い地域の諸言語を比較する印欧比較言語学にとっての一大資料でもあります。

また、本研究室で扱うインド文学は、物語や詩歌などの狭義の文学に限定されません。「言語によって伝えられているインド文化」の総体をインドの文学(Indian literature)と呼んでいます。たとえば、過去数年間の教員および学生の研究テーマには、次のように、さまざまなジャンルのものがあります。

古代インドの家庭儀礼 / 古代ジャイナ教の在家信者の生活規範 / サンスクリット説話集の成立 / マハーバーラタの構造 / タミル恋愛文学 / タミル叙事詩 / 鳥の形の祭壇を作るヴェーダ祭式 / 伝統インド医学(アーユルヴェーダ) / 古代インドの葬礼 / リグヴェーダの詩論 / 古代インド占星術



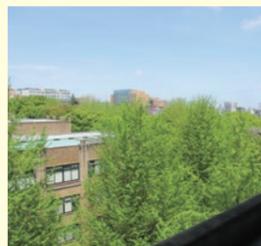
文学をひもといて古代文化をさぐる



現代に受け継がれる古代祭式: 鳥の形の祭壇 (ケーララ州, 2011年)

中国語中国文学研究室

研究室紹介にあたって、まず全員が共通の関心としている「中国語」について考えてみましょう。世界中で最も使用者の多い言語の一つであることはよく知られています。ではいつ頃から使用されてきたのでしょうか?実は遼ること紀元前から現在まで、様々な変化しながらも数千年間使用されてきた言語なのです。多くの古代言語は民族の移動や衰退とともに、消滅してしまいましたが、中国語は周辺諸地域に長い年月にわたって伝播しつつ、その文字である漢字を広く流通させて今日にまで至っています。歴史的に極めてユニークな言語と言えるでしょう。



研究室の窓から(5月の銀杏並木)



ある日の中文研究室(授業前の風景)

中文研究室では、この東アジア全域に広がる漢字流通圏を主要なフィールドに、「中国語学」「中国文学」に軸足を置きながら様々な分野との境界に分け入り、意欲的に学問の地平を広げています。といっても、全員が最初からそんなに難しいことを考えていたわけではありません。実際に所属している学生にそもそも中文にきたきっかけを聞いてみると、「中国映画に興味があった。」とか、「高校の漢文の授業で勉強した項羽と劉邦とかが結構好きだった。」「三国志ゲームにはまって……」など、なんとなく自分の生活に入り込んでいる中国的要素について「ちょっと考えてみたい」と思ったという声が目立ちます。

中国語圏からの留学生は、ちょっと反対で、現在中国文化の中にある日本の影響に関心を持ち、もっと知りたいと思って来たという人が多

くいます。このように考えると中文研究室は「日中の文化について言語を通して考える人たちが集まっている場所とも言えるでしょう。そうして集まった人たちは、各自の興味にあわせて、映画・ドラマ、小説、古典詩文、古代文字、古代中国語文法等、同時代から紀元前に遡るあらゆる資料をまずは「正確に読む」ことから学びはじめます。そのスタイルは創設当初から一貫して変わりません。

ところで中文研究室は現在、赤門を入ってすぐ南側の赤門総合研究棟七階にあります。広くて居心地がいいと学生からも好評です。窓からは赤門前の銀杏並木が見え、古典好きなら覗いてみたい「漢籍コーナー」(清朝末年までの漢籍を手にとって見られます)は、建物の一階下にあります。デジタル化は中国古典籍分野の研究スタイルも一変させていますが、今では古典研究に不可欠な様々な漢籍データベース、論文検索システムも利用できます。色々な意味で中国研究には好立地です。

英語英米文学研究室

「英文研究室」の正式名称は「英語英米文学専修課程」。その名の通りわたしたちの研究室では、おおまかに、「英語学」「英文学」「米文学」の三領域の授業が行われています。英語の仕組みに興味のある人、英語で書かれた文学作品に興味のある人が、広く緩い繋がりで集まった研究室つまり、「英語に関わる研究室」くらいに思っただけにばいたい正解ですが、もう少し各分野について見てみましょう。

英語学は、「英語ってどんな言語だろう」という興味を深める領域です。特定の時期の言語構造(現代英語や古英語)の解明をめざす共時的研究と、言語変化の諸相を研究する歴史的研究が含まれますが、その基礎として、言語の一般的性質・仕組みについて正確な理解を深めていきます。したがって授業では、英語の詳細な事実と、その理論上の意味合いを総合的に把握する訓練に重点がおかれます。

英文学と米文学は範囲が定めがたいほど広いのですが、授業では、アメリカとイギリスの文学(演劇、詩、小説)の精読を主眼として、作品の細部にじっくりと注目し、それぞれの解釈を議論したりしています。とはいえ、みなさんが卒業論文などで英米以外の英語圏の文学を論じることも応援しますし、児童文学、大衆文学などのサブ・ジャンル、美術や音楽と文学との関係などに興味を広げても構いません。教員はそれぞれの関心に応じて主だった作家・作品を扱いますが、それをきっかけに自由な途をひらく、進取の気性こそここでは多とされます。

専修課程としての必修科目を上記三分野から履修することをのぞけば、学生のみなさんはだいたいのところ好みの分野の勉強に集中でき



左から小泉八雲、夏目漱石、ウィリアム・シェイクスピア



研究室に並ぶ洋雑誌

ます。そうして思いだめたトピックや作品について英語で卒業論文を書くことが、英文研究室ライフのいわばクライマックス。例えば、最近のテーマにはこんなものがあります。
【演劇】『ロミオとジュリエット』における曖昧性
【詩】『これは世界に向けたわたしの手紙』: エミリー・ディキンソンの書簡詩
【イギリス小説】『荒涼館』における終わりの感覚
【アメリカ小説】『グレート・ギャツビー』における父・子の葛藤
【英語学】英語・日本語における形容詞の修飾構造

そのほかにも、毎年6月に行われる一泊二日の英語漬けの合宿「English Camp」や毎週水曜日に英会話を楽しみながらお昼を食べる「Clark Lunch」などの研究室イベントもあって、英語でコミュニケーションをとる喜びを味わってもらえると思います。

ドイツ語ドイツ文学研究室

ドイツ語ドイツ文学研究室では、ドイツ語で書かれた文芸作品や文芸思想を広く学ぶことができます。とりわけ十八〜二十世紀の近代文芸を中心としたカリキュラムを組み、作家や作品、また時代思潮や芸術思想などにも注意を払いつつ、関心のある皆さんが扉を叩くのをお待ちしております。

本研究室で学んでいった先達の進路は多彩です。ドイツ文学語学の研究・教育において目ざましい活躍をしている多くの学究、作家・文筆家として多くの作品を世に問うている文人、また、芸術関係や出版界さらにはジャーナリズムなどにおいて出色の動きをしている多様な人材など、数え上げればきりがありません。本研究室の創設は、文科大時代の一八八七年に遡りますが、それ以来、大学アカデミズムはもとより、その枠を超えて、多様な仕事に従事しながら、皆それぞれに日本の、そして世界の人文的知性の一翼を担い続けています。青春の一時期にドイツ語とドイツ文学を学ぶために本研究室に集ったことが、単なる事実にとどまらず、彼らのその後の歩みに深く、かけがえない刻印を残しているのです。

若い時代にドイツ語で書かれた多くの知的精華に触れ、それで自らを耕すというのは、非常に贅沢で、かつ得難い経験です。さらに、近代日本語の形成に非常に大きな影響を与えた外国語を通じて、私たちの言葉である日本語のあり方について、より注意深く、より深く考える習慣を身につけるのは、その後どの分野に進む

にしろ、いよいよ重要になってゆきましょう。言葉は単なる取り引きの道具ではありません。

本研究室で学び研究する私たちは、何よりも言葉を大切にすることを戒めとします。わかりにくい言葉であればこそ、立ち止まって考えます。それは、鬱蒼たる言葉の森に分け入ってゆけば、これまで目にしたこともないような光がいつか必ず差してくることを予感するからなのです。長く読み継がれる書物と本気で言葉を交わしあおうとするならば、滞りや澱みを恐れる必要はありません。いつしか私たちは、自分自身の言葉で何かを語り出そうとするでしょう。

演習室で、また自習室で、たった一つの文、あるいはたった一つの語に頭を悩ませ、それが思いがけず広大な世界へと開かれていることに気づくとき、ふと視線を上げれば西側の窓越しには、総合図書館の閲覧室で、時間を忘れて真剣に書物に向き合う人影が目に入ります。見知らずの彼らは私たちの似姿であり、そして私たちの仲間なのです。



【共同研究室】机の上には茶菓と書物



演習室から総合図書館を望む窓

フランス語フランス文学研究室

フランスはしばしば「文学の国」と呼ばれるほど、文学に特別な地位を認める国です。フランス文学の数々の傑作は、フランス国民の意識そのものを形成する上で大きな役割を果たしてきました。日本でもフランス文学の重要性はつとに認められ、広範な読者を得ています。本研究室はわが国におけるフランス文学受容・研究の拠点として、長きにわたり成果をあげてきました。初代日本人教授・辰野隆は達意の翻訳によってフランス文学の紹介に努め、小林秀雄ら多くの逸材を育てました。第二次大戦中、渡辺一夫はフランソワ・ラブレール研究を手がかりに狂信的な時代を疑い続け、戦後、反人間的な精神のこぼれを批判するユマニスム人文主義の体現者として思想界の一翼を担いました。その深い影響のもとに出発した大江健三郎は、尖鋭的感覚に満ちた独自の小説世界を構築してノーベル文学賞を受賞しました。他にも数々の作家、翻訳家や研究者を輩出していますが、卒業生の進路は多岐にわたり、社会に有為な人材を送り出しています。

「汝の望むところをなせ」というラブレールの言葉をモットーに掲げる本研究室では、何よりも自由と批判精神とを尊重しています。授業は基本的にテキスト講読の形をとり、自分の解釈を辞書や参考文献と対照させて検討する読解態度を習得することを目的としています。学生の自発性は常に尊重され、各自は緻密なテキスト読解の方法に馴染んだ上で、仲間同士で切磋琢磨しながら自らの研究テーマを掘り下げ、立派な研究論文に仕上げ

いきます。フランス文学は詩や小説のみならず、哲学・思想や芸術批評に至る幅広い分野を含んでいますから、卒業論文で扱われる題目もさまざまです。美術や映画、音楽といった他の領域と文学の相関関係も興味深いテーマとなるでしょう。

専任教員および非常勤講師による講義は、中世から現代まで、専門的かつ通時的に学べるよう配慮されています。外国人教師によるフランス語の授業も各種開かれ、実践的なフランス語の運用能力を高めるために最適の内容となっています。また本研究室は、エコール・ノルマル・シュペリール(高等師範学校)およびジュネーブ大学などフランス語圏の教育機関と提携関係にあり、フランスの学会との交流も盛んです。例年、10名前後の海外の研究者や小説家、詩人、映画人等が研究室を訪れ、講演会やシンポジウム、セミナーが催されています。いながらにして留学しているような思いに浸れるといった大げさかもしれませんが、学生諸君にもきっと、フランス文学・文化研究の最先端にいる気分を味わってもらえるはずです。



授業には学部・学科の垣根を越えて学生が集う



ノーベル賞作家ル・クレジオ氏の講演会(中地教授との対談形式)一番大教室、2015.12

スラヴ語スラヴ文学研究室

私たちの研究室では、広くスラヴ世界の言語文化の研究に取り組んでいます。

スラヴの世界はとても広く、ロシアはもとより、ポーランドやチェコ、ドイツに至るまでのヨーロッパ中部、北はバルト海沿岸から南はバルカン半島と多様な地域を含みます。この地域を対象に、スラヴ研究室では、スラヴ比較言語学や現代のスラヴ語、19世紀ロシア文学、ソビエト期の芸術や文化、あるいはポーランド文学、チェコ文学、バルカン半島の南スラヴ語とその文学など、中世から近代・現代に至るまでの約1000年に及ぶスラヴの語学・文学・文化を研究テーマとして扱っています。

ロシアの作家は、ドストエフスキーやトルストイは言うまでもなく、現代の人気作家も日本で翻訳されています。ポーランドの作家スタニスワフ・レムの『惑星ソラリス』はタルコフスキーによって映画化され、ハリウッドでもリメイクされました。

チェコ文学では、ロボットの語源となった戯曲を書いたカレル・チャペックは飼犬の『ダーシェンカ』をモデルにした著作でも有名です。セルビア(旧ユーゴスラヴィア)のミロルド・パヴィチは『ハザール事典』という小説なのに辞書のように項目が羅列されてできている奇妙な作品を発表



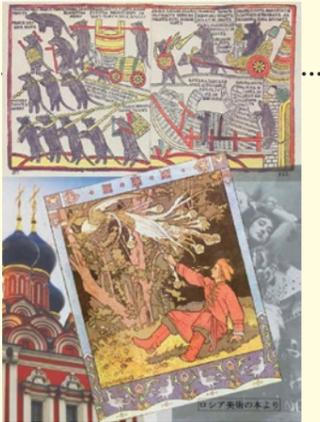
スラヴ語世界の地図

しています。彼に限らず、いろいろな仕掛けを施して読者を驚かせる作家がスラヴには多く、日本では知られていない作品を探る宝探しのような楽しさがあります。また、フランスで著作を続けるミラン・クンデラ(チェコ)など、亡命作家たちを含めるとスラヴの作家たちは世界中で活躍しています。

こうした様々なロシア東欧の文化・文学を深く理解するために、授業では、ロシア語はもちろんのこと、ポーランド語、チェコ語、ボスニア語・クロアチア語・セルビア語の入門や講読も開講しています。

卒業論文では、文学・語学だけでなく、映画・音楽・バレエなど、幅広いテーマがとりあげられています。留学も、ロシアや東欧諸国などへ、夏休みを利用して語学を勉強する短期のものから、学内の留学助成制度を利用した長期のものまで行われています。

スラヴ語スラヴ文学研究室は、テーマの多様性もあって、小さいながら個性あふれた研究室です。教員、大学院生、学部生を問わず、学問上の経験や専門分野の違いを超えた自由な交流を導ぶ気風は、研究室の良き伝統として受け継がれてきました。私たちのホームページを覗いて、ぜひスラヴ世界への一歩を踏み出してみてください。



ロシア美術の本より

現代文芸論研究室

現代文芸論研究室は2007年に発足した比較的新しい研究室です。現代的な見地から世界文学を扱います。文学の読まれ方、書かれ方は現代では大きく変貌し、多様化しています。この多様性を理解するための理論や、多様性の具体例としての中・東欧諸国やラテンアメリカ諸国、広域英語圏の文学、移民文学といった分野を研究する教員や学生たちが集う場所です。多くの言語を操り、時には複数の言語で創作もする作家の少なくない現代を理解するために、複数の国や言語を視野に入れての研究も推奨されます。

外国からの留学生が多いのも当研究室の特徴で、ポーランドやベネズエラ、カザフスタン、中国、韓国などからの留学生が、各自の文化圏や文学との関連で日本文学を研究しています。

外国から研究者や作家らを招いての講演会、シンポジウム等のイベントも、現代文芸論研究室では毎年数多く主催しています。こうしたイベントに、時にはスタッフとして、時には聴衆のひとりとして参加することによって、学生たちはゲストと交流を結び、大いに刺激を受けています。とりわけ研究者を目指す大学院生にとっては、これらの交流は後の研究生生活にもきっと役立つことでしょう。専任教員は以下のとおりです。
沼野充義教授：世界文学へのアプローチ、ロシア・ポーランド文学
柳原孝敦教授：ラテンアメリカ文学・文化、広域スペイン語文学
阿部賢一准教授：チェコを中心とした中東欧文学・芸術、比較文学
亀田真澄助教：ロシア東欧文化、表象文化論

このほかに他研究室から大橋洋一教授（英文学、批評理論）、三谷



夏合宿での研究発表会



研究室での歓談

恵子教授（スラヴ言語学）、阿部公彦准教授（英米文学、現代日本文学）、楯岡求美准教授（ロシア文学、演劇）らの協力を仰ぎ、授業を提供していただいています。また、毎年、非常勤講師をお招きし、現代文芸論らしい特徴ある多彩な授業をお願いしています。

学生が自由に利用できる研究室や演習室では、自主的な読書会が開かれ、毎年夏には合宿も行われています。こうした交流を通じて、学生たちも広い視野に立って勉強する志がおのずと醸成されていきます。

西洋古典学研究室

西洋古典学（英語では‘Classics’）は、「古代ギリシアおよびローマの文化を研究教育する学問」です。そのためにギリシア語およびラテン語の文法を覚え、辞書を引きつつ、また注釈書を読みながら、毎週原文テキスト（例、ホメロス、ギリシア悲劇、プラトン、ウェルギリウス、キケロ）を読んでいくという地味な学問です。しかも、辞書は基本的に希・英および羅・英です。注釈書も英語（仏語や独語）です。仮にこれだけのことをしたとしても、果たしてこの努力が卒業後社会に出て報われるのだろうか、という疑問を持つ人は多いでしょう。答えは「イエス」です。理由は以下の通りです。

第一に、ギリシア・ラテン作品（「古典作品」と言います）は、その文法的理解もなかなか困難ですが、仮にそれができた場合でも、法、経済、宗教、思想などの現代の思考枠組や分析概念ではその「意味」を掴むことはできません。しかし、そこがポイントです。この訓練によって我々の「センス」が磨かれるのです。

第二に、世界はグローバル化しています。日本社会はこの流れに抵抗していますが、それは所詮無理な話。グローバル化の進むところ、西洋人は必ずいます。その中には必ず西洋古典学を学んだ人がいます。西洋古典学は彼らと戦うための強力な武器（「センス」）です。ビジネスあるいはパーティの場で、「大学で何を学んだの？」と尋ねられて「I read Classics.」と答えれば、名刺交換の必要はありません。いまだ、ビジネスの世界や



古典叢書



F.リッサーラック教授（パリ）の講演会 2015年10月 文学部1番大教室

国際機関で働く人は、みんな経済、政治、法学を専攻しているとお思いませんか？ 古典、哲学、歴史を専攻したという人が意外と多いのです。

第三に、上述のように、西洋古典学を勉強することは英語はじめ西洋語を学ぶことを含んでいます。ギリシア語・ラテン語起源の重要な英単語は非常に多いし、またテキストを厳密に（英語の辞書を使って）読み、大量の注釈書や研究書を読む訓練は、グローバルな社会で非常に役立ちます。さらに、きっと皆さんの中には、外国のビジネススクールやロー・スクールに行く計画をしている人がいるでしょう（がんばってください）。その人は、西洋古典学を大学で勉強していて「本当によかった」とかならず実感します。

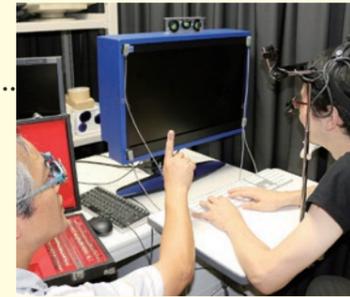
最後に、将来大学院でこの学問をもっと深く勉強したいと考えている人に対しては、オックスフォードをはじめとして留学に関して最大のサポートをします。

心理学研究室

心理学研究室は、1903年に設立された日本最初の心理学研究室です。100年以上にわたって心の科学的研究にとり組み、世界最先端の研究成果をあげながら、日本の基礎心理学をリードしてきました。人類最後の、そして最大のフロンティアとも言われるのが、心と脳の問題です。そのしくみを科学的に理解することは、現代のテクノロジーをもってしてもきわめて難しい課題です。心のふしぎ。脳の驚異。人間という謎。永遠に解けない謎かも知れません。私たちはこれからも根気よく、一步一步実証的に、心に挑みつつけます。

知覚・注意・記憶・行動などの人間の精神現象を、実験心理学的手法や脳科学的手法、認知科学的手法により研究しています。心理学にはさまざまな分野がありますが、心理学研究室は中でも特に、知覚や認知の過程を実証的実験によって明らかにする基礎研究に中心を置いています。

心理学研究室には教授・准教授・助教のほか、研究員、大学院生、学部学生、研究生らが所属し、それぞれ研究活動を行なっています。教授・准教授はラボを主宰し、研究員や学生はそれぞれのラボに所属しています。教員や研究員、大学院生は国内外の関係諸学会に所属して活動し、学会発表や研究論文などの形で研究成果を発信しています。心理学研究室の研究成果は、高いインパクトを持つ国際論文誌に掲載され、多くの研究論文で引用されています。シンポジウム等で



【眼球運動測定装置】
眼の動きを計測することで、実験参加者がどこを見ているかが分かる。



【ドライビングシミュレータ】
運転環境を模した装置（バーチャルメカニクス社製品使用）で、運転者の認知機能を調べる。

特別講演を依頼されることも多く、東京大学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究も活発に行われています。

心理学研究室には、毎年、駒場の教養学部前期課程から学生が進学します。多くは文科III類からの進学ですが、理科からの進学も珍しくありません。学部3・4年次には、演習や講義で幅広い知識を身につけるとともに、実験演習で数々の実験を行なってレポートを書き、実験機器の操作方法やデータ解析方法などを学びます。最終年次には卒業論文研究に取り組みます。教員の指導の下でオリジナルの実験研究を行ない、論文にまとめ、卒業論文発表会で発表を行ないます。卒業生の多くが就職し、就職先はマスコミ・金融・商社・製造業・官公庁など、きわめて多彩です。大学院に進学する方に対して、学内外の研究設備を活用する機会や、国内外の研究者との研究交流の機会を促進し、指導体制の充実を図っています。修了生の多くは、修士（心理学）、博士（心理学）の学位を得て、研究者や大学教員として、活躍しています。

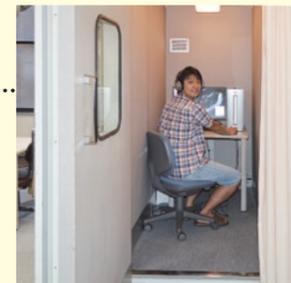
社会心理学研究室

【About Us】「社会心理学」とは文字通り、社会的動物たる人間の心の成り立ちやそのメカニズムを総合的に考える学問です。扱うテーマは多岐にわたりますが、いずれも、私たちが社会の中でさまざまな他者と関わり合いながら生きる日常の生活に、深く関連しています。「社会的な行動と脳の関係について研究したい」

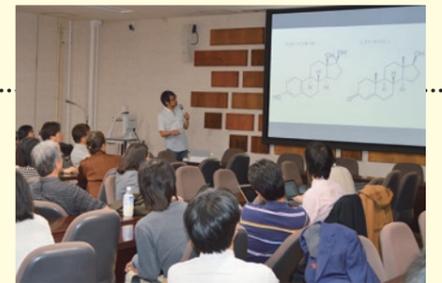
「感情の理不尽さについて考えたい」
「偏見・格差・援助などの社会問題について議論したい」
「企業組織におけるリーダーのあり方について考察したい」
「異文化に生きる人々の思考や行動様式の違いについて知りたい」
…これらはすべて、社会心理学におけるリサーチ・クエストの例です。私たちは、一方で人の神経・生理基盤にまで分け入り、他方で社会構造や文化へと視野を広げながら、こうした問いに対する答えを探求しています。

【Mission】人文社会科学は今、激しい変動の時代を迎えています。社会心理学もその例外ではありません。そうした激動の時代の中、私たちは、従来の研究領域の区別にこだわることなく、文理の壁をも超えて、貪欲に新しい学問のあり方を求めていきたいと考えています。

人間とは何者なのかを考察してきた、哲学をはじめとする人文学領域。人と制度・組織の関係を論じてきた、経済学・法学・政治学・経営学などの社会科学領域。これらとの連携はもちろんのこと、神経科学・生物学・情報科学といった自然科学領域とも手を携えながら、人



実験風景（地下実験室の防音ルームにて）



コロキウムの様子（学外から講師をお招きして）

と社会の関わり方をともに真摯に考え、新しい形の「人間知」を生み出すことを目指しています。21世紀の統合的な人間科学の実現に向けて、志・憧れ・野望をもつ人々にとっての知的なプラットフォームを作ること、それが私たちのミッションです。

【Education】個々の教員が個別にラボを運営しつつ、協力して教育に従事しています。いずれのラボにおいても、教員と大学院生の共同研究が数多く行われていること、また、海外の研究者や他学問領域の研究者とのコラボレーションが盛んであることが特徴的です。国内外の研究者をスピーカーに招いて開催される「社会心理学コロキウム」には、誰もが自由に参加することができます。

日々の授業においても、国際性や学際性、さらには実社会とのリンクを意識した多彩な講義科目のほか、実験・調査・現場観察といった方法論に関する実習科目も数多く展開されています。これらを通じて身につける「現象の捉え方」、「問いの立て方」、「データに基づく検証のしかた」といった学びの方法は、将来どのような職業に就く人にとっても、社会や人間について深く知るための重要な礎となるはずで

社会学研究室

社会学研究室は、明治時代から「社会」について研究をしています(当時は「世態学」という名前でした)。

「社会」を研究するということはどういうことでしょうか。「社会」を意識する機会は日常あまりないかもしれません。しかし、友達関係、入学、卒業、就職、お葬式、選挙、犯罪、格差、街並み、塾、ネット、事故、ありとあらゆる局面に「よく考えると、なぜそうなっているかわからない不条理」があります。そういう「わからなさ」を、人間関係、家庭、学校、地域、会社、業界、国家など、様々な場で起こる「社会」現象として探究するのが社会学です。具体的には、探究の基礎を与える学説・理論、さらに家族、都市、地域、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、階層、社会意識、文化、計画、福祉、科学、技術、環境といったさまざまな領域が含まれます。社会学研究室は、そうした探究のための知的空間です。

社会学研究室には文学部最大の200名近くの学生がいて、「社会」について様々な角度から探究を進めています。様々な問題関心を持つ学生が集まっているので、予想もしないような出会いもあり、楽しいキャンパスライフを過ごしている学生が多いのが特徴です。共同研究室には学生が交流する空間があり、多くの学生が日々情報交換や議論をしています。また、貴重な書籍、資料が揃っていますので、勉強する環境が整っており、学生も自主的に研究会などを開いています。

授業はゼミ形式で行われます。ゼミというのは、高校の授業とは違い、学生同士が自分の頭で考えた意見を言い合い、先生と共に議論し、新たな視野や知見を得る、ということが中心になってきます(テーマは

ゼミごと、年度ごとによって変わってきます)。それぞれのゼミが夏休みには合宿に行ったり、コンパをしたりして交流を深めています。

必修ではありませんが、社会調査実習という授業もあります。質問紙調査を行ったり、実際にフィールドに出かけてインタビュー調査を行ったりすることで、「社会」を肌で感じる貴重な体験となっています。また、ソウル大学社会学部と2年に1回国際ワークショップを重ねてきており、その都度英文の会議録を発行しています。

卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していましたが、最近は金融やメーカーに就職する人や、国家公務員・地方公務員になる人も増えてきました。さらに学部卒業生の約1割程度は、大学院に進学し、研究者を目指します。クローン会という同窓会組織を通じて、多彩なOB・OGとも交流が続いています。

大学院では、アメリカ、フランス、中国、韓国などの国からやってきた留学生が、これまでさまざまなかたちで勉学しており、学問には国境のないことが感じられます。



つながり学ぶ。

北海文化研究常呂実習施設

北海文化研究常呂実習施設は、北海道の東部、オホーツク海沿いの北見市常呂町に位置する、文学部ではただ一つの学外施設です。最近、冬季スポーツ競技のカーリングでも注目された常呂町は、冬には流氷が押し寄せる極寒の地ですが、豊かな海産食料資源に恵まれており、史跡「常呂遺跡」をはじめとする大規模な先史文化の遺跡群が残る地域として知られています。これらの遺跡の発掘調査を、文学部の考古学研究室は半世紀以上にわたって継続してきました。当施設は遺跡調査の拠点として1973年に設置され、発掘調査の実習など、東北アジア考古学を主なテーマとする教育・研究を行っています。教員二名が常駐する小さな施設ですが、設備としては研究棟のほか、学生宿舎や博物館相当施設である「常呂資料陳列館」も併設されており、自然と文化の遺産に囲まれた環境のなか、蓄積された研究成果と資料を活かした体験型の教育プログラムが開講されています。

文学部で考古学を専修する学部生は、当施設で開講される野外考古学の実習が必修科目となります。この実習では、学生宿舎に宿泊しながら一ヶ月にわたって遺跡の発掘調査に携わります。昼は発掘、夜はフリーティングや地域との交流がおこなわれる濃密なプログラムが続きますが、研究環境や設備が充実した実習として国内外から評価を得ています。近年では海外の大学とも協力し、考古学を学ぶ学生同士が調査を共にしながら交流を図っています。



竪穴住居跡の発掘調査(野外考古学実習)



常呂資料陳列館

発掘調査の実習に加えて、考古学専修以外の学生を対象とした教育プログラムも開講されています。文学部の学芸員養成課程科目として開講されている博物館学実習Aでは、資料陳列館に所蔵されている学史的に重要な考古資料を扱いながら、企画展の制作など、地域における博物館の活動を経験し、実践的に学ぶことができます。ほかにも、英・セインズベリー日本藝術研究所と協力した文学部夏期特別プログラムの後半部分や、全学の学生を対象とした体験活動プログラムが当施設にて開講されており、発掘調査をはじめとする考古学の研究や、博物館学芸員の活動を实地で体験できる場が用意されています。

このように当施設では、文学部の学生はもとより、全学の学生に対しても開かれた教育プログラムが開講されていますので、北方の考古学、そして夏や冬の北海道に興味のある方は、ぜひプログラムに参加してみてください。

文化資源学研究専攻

世界には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積があります。文書とは書かれた「ことば」、文献とは書物になった「ことば」です。多くの人文学・社会学系の学問は、これら「ことば」を相手にしてきました。ところが、現代では学問領域があまりにも細分化されたばかりか、情報伝達技術の発達で「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係が希薄なものに変えてしまいました。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいですが、いったん学問領域が設定されると、おそらくそこからは無数の「かたち」が視野の外へと追いやられてしまいます。さらに、身体、楽器、コンサートホール、レコードなどの「かたち」をとめないながら、それ自体は目には見えない「おと」の存在も忘れてはなりません。

「文化資源学 Cultural Resources Studies」(resourceは泉に臨むという意味)とは、いわば既存の学問体系の側に立つことよりも、体系化のもとになった資料群の中に分け入ることから始まります。文化を根元に立ち返って見直し、資料群から多様な観点で新たな情報を取り出し、社会に還元することを目指しており、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考え続けています。

文化資源学研究専攻専任教員に加えて、文化資源学のトランス・ディシプリナリーな性格を反映して、研究科の他専攻の教員も様々なかたちで文化資源学の研究教育に関わっています。さらに、東京大学内の史料編纂所、総合研究博物館、東洋文化研究所、埋蔵文化財



本郷キャンパスを文化資源学として探究する

調査室と連携し、学外は、国立西洋美術館、国文学研究資料館などから併任教授を招いています。

文化資源学研究室のさらなる特色は、社会人に対して大きく門戸を開いていることでもあります。それは、大学を社会に対して開こうとする意志表示であり、本研究科にあっては文化資源学研究室がその最先端にあります。

韓国朝鮮文化研究専攻

本研究科は2002年4月、大学院人文社会系研究科に韓国朝鮮文化研究専攻が設置されたのにもない誕生しました。韓国朝鮮文化に関する専門的な研究・教育組織としては日本で最初のもので、その母体となったのは1993年4月に設置された文学部附属文化交流研究施設朝鮮文化部門(朝鮮文化研究室)ですが、歴史をさかのぼれば、東京大学における韓国朝鮮文化研究の長い伝統を受け継ぐものでもあります。

朝鮮半島と日本列島は地理的に近接しており、両地域の間では、古代から現代に至るまで政治・経済・社会・文化といった人間生活のさまざまな分野で深い交流が積み重ねられてきました。日本列島で人々が創り出してきた歴史と文化は朝鮮半島のそれと分かちがたく結びついており、今日もなおそれは続いています。東京大学はその重要性をいち早く認識し、1916年には全国の大学に先駆けて文学部に朝鮮史講座を設置し、本格的な研究・教育を開始しました。

本研究科はその伝統のよい部分を継承し、歴史学・考古学・社会学・思想史・言語学・文学・文化人類学など人文学および社会科学の幅広い諸分野から、韓国朝鮮の文化と社会を総合的に研究・教育することを目的としています。それと同時に、日本における韓国朝鮮研究のセンターとしての機能も果たすべく、前身である朝鮮文化研究室の時代から海外の研究機関との研究交流に力を注ぐとともに韓国朝鮮関係の図書収集にも意欲的に取り組んできました。その結果、本研究科が

所蔵する研究文献や各種資料は日本有数の規模となっています。とりわけ韓国の学術雑誌については日本最大の所蔵を誇っています。そのため学内の学生や研究者だけでなく、日本国内はもちろん韓国をはじめとする海外から研究室を訪れる研究者も少なくありません。

本研究科は、制度上は大学院の組織です。所属している大学院生の専門領域や出身学部は多様であり、また韓国・中国をはじめとする海外からの留学生や在日コリアンの学生が多いことも特色の一つです。一方、学部の専修課程を持っていないため研究室所属の学部生はいません。とはいえ、学部の各専修課程において韓国朝鮮の文化・社会に関心を持つ学生が本研究科を利用することはもちろん可能です。また研究室所属の教員は学部学生を対象とする授業も開講しており、それらを通じて最先端の研究の一端に触れることができます。



研究室主催の東京大学コリア・コロキウム



研究室内の様子

次世代人文学開発センター

次世代人文学開発センターは人文社会系研究科に附設され、専修課程ではないため所属する学生はいません。研究プロジェクトを運営したり、複数分野にまたがる領域を研究したりすることを主たる業務としていますが、さまざまな授業を開講することで教育にも携わっています。3つの部門がありますので、それぞれについて紹介します。



集英社寄付講座の公開講座



創成部門の研究会

a. 先端構想部門 複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象とする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行い、その研究成果を公開・発信していくことを目的とする部門です。文学部の専任教職員によるファカルティディベロップメントとしての研究懇談会を主催・運営し、その一部をウェブ上で公開しています。学部の授業としては、「文化交流演習」・「文化交流特殊講義」を開講しています。

また、集英社高度教養寄付講座を設置し、後期教養教育の授業や公開講座を開いています。

b. 創成部門 新しい研究分野を創成するためのプロジェクトの拠点となる部門です。現在は死生学・応用倫理センターとして別置されている組織も、以前はここにありました。

2013年からは人文情報学拠点を設置し、日本における人文情報学(デジタルヒューマニティーズ)の構築、国際学会連合との関係形成を通して、日本の人文学の国際的な地位向上に貢献しています。具体的には、仏教の経典全集である大蔵経のデジタルテキストコーパスを

基盤としつつ、京都大学人文科学研究所、国立情報学研究所、アメリカ、ドイツ等の諸大学研究所と連携し、文字資料による世界最先端のデジタル知識基盤のモデルを提供しています。学部の授業としては、「人文情報学概論」・「人文情報学特殊講義」を開講しています。

c. 萌芽部門 次世代の人文学にとって必要な研究や、他大学との共同研究プロジェクトの東京大学における拠点として機能しています。2015年まではイスラーム地域研究、2016年までは演劇学研究分野、そして現代インド地域研究などで構成されてきました。

演劇学では、日本の演劇・舞踊が形態資料・文字資料としていかなる文化的価値を持つのか、その特色はどこにあるのか、という研究を進め、文化資源学研究専攻に講座を持っていました。

現代インド地域研究は、人間文化研究機構が推進する事業の一環として、京都大学、東京大学、広島大学、東京外国語大学、国立民族学博物館、龍谷大学の6大学に設置された拠点の一つとして、現代インドに関するネットワーク型の共同研究を推進しています。インドの経済と環境に関する基本的な資料や文献を収集・蓄積し、データベースを構築する作業を進め、それらをもとに、インド経済・環境の長期的な動向分析を行ってきました。

死生学・応用倫理センター

本研究科では2002年から2012年までCOEプロジェクト「死生学」を展開してきました。これは現代における死のあり方を通して人間の「生」をとらえ直す研究教育プロジェクトです。同時期、本研究科は全学に対して「応用倫理教育プログラム」を開講してきました。応用倫理というのは、科学と技術が様々な問題を生んできている現状に対峙し解決策を模索しようとする領域であり、生命倫理、環境倫理、技術倫理、情報倫理、世代間倫理などの多様な分野を含みます。本研究科では、人文学の学知に基づきつつも、ディシプリンの垣根を越えて、現代的な状況に対応する新たな知を開拓してきたわけです。



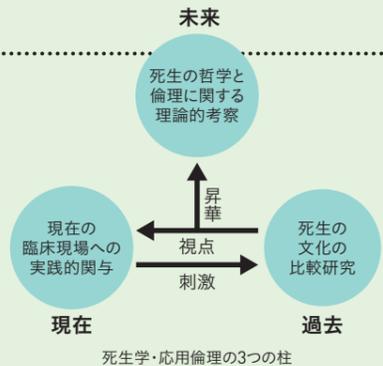
死生学・応用倫理センター運営委員

COEプロジェクトの終了を前に、その活動を更に継続的に発展させていくために「死生学・応用倫理センター」は設立されました。また寄付講座「上廣死生学・応用倫理講座」がセンターに付設されることになりました。

私たちが構築しようとする「死生学」「応用倫理」は三つの核を持ちます。第一は、現代的な状況に積極的に関わっていく「臨床」的分野です。この分野から、私たちは今いかなる知が求められているかを知ることになります。但し、本当の意味で現代の諸問題を乗り越えるためには、人間存在の本質に関する深い洞察が必要であり、そのためには過去の人類の叡智に学ぶ必要が出てきます。それが第二の分野になります。

第一の分野は第二の分野に刺激を与え、第二の分野は第一の分野に現状を正確に認識するための視点を与えます。しかし、それだけではまだ充分ではありません。第一の分野(現在)と第二の分野(過去)を踏まえた上で、では将来においてどうあるべきであるのか(未来)に昇華させる必要があります。つまり、現在と過去を踏まえた上で、人類の未来を哲学的に究明すること、それが私たちが目指す「死生学」と「応用倫理」になります。

以上のような理念のもとで、「死生学・応用倫理センター」は、①東京大学全学の学部生・大学院生を対象とする「死生学・応用倫理教育プログラム」、②医療、看護、介護等の現場に携わる人々に人文知を提供する「臨床死生学リカレント教育」、③公開の国際シンポジウムなどの「国際的・社会的な発信」、④多様な分野の若手研究者を育成する「次世代研究者の支援育成」を行っています。



国際交流室・日本語教室

大学院人文社会系研究科・文学部には、留学生158人、外国人研究員17人が在籍しています(平成28年5月1日現在)。留学生の内訳は、学部15人、修士課程37人、博士課程66人で、国籍は中国が最も多く74人、次いで韓国53人、台湾9人の順となっています。本学部では、このような留学生や外国人研究員が日本での生活・研究を円滑に進められるよう、学生生活全般については「国際交流室」が、日本語教育については「日本語教室」が担当して支援を行っています。



夏季集中講座の授業風景



ランチの会

「国際交流室」では、様々な問題の相談に応じるとともに、留学生同士や日本人学生との交流が進むよう、留学生見学旅行や留学生懇親会などの行事も行っています。

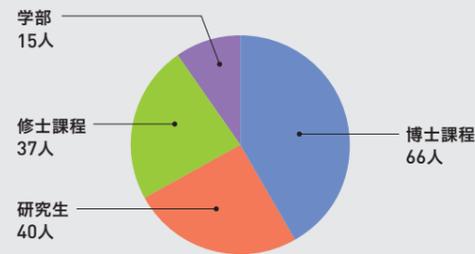
「日本語教室」では、日本語で学位を取得する留学生のためにアカデミックな日本語が学習できる科目を多く開講するとともに、文学部ならではの科目も開講しており、高いレベルの日本語学習を求める他学部からの留学生も多数受講しています。



■2016年度開講の授業内容
論文の書き方、論文の読解、口頭発表の方法、引用の方法、漢文の読み方、オノマトペの使い方、メールの書き方 など

◀「古典入門」の使用教材

■留学生身分別人数 *平成28年5月1日現在



■大学院人文社会系研究科・文学部 留学生数



■大学院人文社会系研究科・文学部 交換留学協定校

中国	山東大学儒学高等研究院・韓国研究中心	イラン	テヘラン大学
中国	北京大学歴史学系 *総合文化と担当	フランス	エコール・ノルマル・スーペリエール
香港	香港中文大学文学院	フランス	エコール・ノルマル・スーペリエール(リヨン校)
インド	デリー大学	ドイツ	ベルリン自由大学(歴史文化学部、他) *総合文化と担当
韓国	ソウル大学校人文大学	イタリア	ピサ高等師範学校
韓国	釜山大学校人文大学		

■文学部 国・地域別留学生数 *平成28年5月1日現在

国・地域	計
アジア	
シンガポール	1
香港	1
韓国	8
中国	2
台湾	1
小計	13
ヨーロッパ	
ロシア	1
イギリス(香港)	1
小計	2
計	15

■大学院人文社会系研究科 国・地域別留学生数 *平成28年5月1日現在

国・地域	修士課程	博士課程	研究生等	計
アジア				
香港	1			1
韓国	12	24	9	45
モンゴル	1			1
中国	19	29	24	72
台湾	4	4		8
小計	35	59	33	127
中近東				
イラン			1	1
小計			1	1
オセアニア				
オーストラリア			1	1
小計			1	1
北米				
アメリカ	1	1		2
小計	1	1		2
中南米				
ブラジル		1		1
パラグアイ		1		1
小計		2		2
ヨーロッパ				
フィンランド			1	1
ドイツ			1	1
フランス	1	1		2
オーストリア			1	1
ポーランド	1	1	1	3
ロシア			1	1
カザフスタン			1	1
小計	1	4	5	10
計	37	66	40	143

東京大学大学院人文社会系研究科・文学部図書室には、110万冊を超える蔵書があります。国内屈指の歴史と規模を誇り、蓄積された教育・研究資料は、膨大なものがあります。これらの資料は文学部3号館図書室、法文2号館図書室、漢籍コーナー、および各研究室に分散して配置されています。



【法文2号館図書室】



書庫

閲覧室

法文2号館図書室の配架資料は、3号館が図書中心であるのと対照的に、雑誌が中心となっています。雑誌のバックナンバーのほか、参考図書(辞典・事典、書誌・所蔵目録等)、課程博士論文、マイクロ資料等が配架されています。

4層に分かれていて、1階、2階は主に和雑誌が、3階、4階には洋雑誌が配架されています。書庫の出入りは自由ですので、利用者は書庫内で利用したい雑誌を直接手に取って、その内容を確認することができます。

法文2号館4階に受付カウンターがあります。2号館の閲覧室は、天井がとても高いので、空間的には3号館図書室よりも、かなりゆったりと感じられます。個人閲覧席を整備したキャレルコーナーもあって、閲覧席には十分に余裕がありますので、3号館図書室ばかりでなく、2号館図書室も併せてご利用いただければと思います。

書庫内には製本雑誌の配架スペースのほかにも、貴重書庫・新貴重書庫・準貴重書庫が設置され、インド哲学仏教学、宗教学宗教史学、美学芸術学、日本史学、西洋史学、東洋史学、言語学、国語学、国文学、心理学の各研究室の貴重書、準貴重書の一部が収蔵されています。

雑誌については、所蔵タイトル数で13,000を超えています。製本された雑誌は、一部を除いてすべて2号館図書室の書庫に収められており、バックナンバーセンターとしての役割を果たしています。書庫内は

また2号館図書室には、マイクロリーダー2台が設置されています。図書室で所蔵するマイクロフィルムはもちろん、研究室所蔵のマイクロフィルム等も、ここで閲覧することができるようになっています。

【文学部3号館図書室】



地下1階閲覧スペース

布文館

文学部3号館図書室は、1987(昭和62)年に建設された文学部3号館の地階部分にあります。文学部図書室の総合受付窓口になっており、利用者登録のほか各種申請の受付、文献複写・現物貸借の依頼受付、他機関への紹介状発行、レファレンスサービス等を行っています。

地下2階フロアは、書庫スペースのみになっていますが、地下1階フロアには書庫スペースのほかに閲覧スペースがあります。

3号館図書室には、主に各専修課程の図書が配架されています。地下2階のフロアには言語学、英語英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス語フランス文学、スラヴ語スラヴ文学、南欧語南欧文学、西洋古典学、現代文芸論の各専修課程の図書が、地下1階のフロアには、それ以外の専修課程の図書や叢書が、それぞれ研究室ごとにコーナーを分けて配架されています。これらの図書は、すべてOPAC(オンライン蔵書目録)に登録されているので、検索結果をみると図書室内の何処にあるのか、その配架場所を特定することができるようになっています。

さらに地下1階フロアの奥には、本学医学部の卒業生である布施郁三博士(1905-1995)にちなんだ記念閲覧室の布文館があります。布施博士は若いころから仏教や東洋思想に心を寄せられ、東京大学在学中も文学部の講義に出席して、大きな感銘を受けられたことから、後年文学部の教育・研究のために多額の寄付を申し出られました。

布文館内には、基本的な参考図書類が布施記念文庫として配架されているほか、本研究科・学部教員著書等もまとめて配架されています。正面は一面のガラスで、その向こうには三四郎池(育徳園心字池)とその周辺の鬱蒼と茂る木々の緑を目にすることができる、とても快適な閲覧スペースです。

【漢籍コーナー】



閲覧室

書庫

『正徳朝鮮信使登城行列圖』

漢籍コーナーは、各研究室が所蔵する「漢籍」(中国前近代資料)を集中配架・共同利用するために、1967(昭和42)年に法文2号館2階に設置されました(利用開始は1970年)。その後、2004年2月に赤門総合研究棟6階に移転し、現在に至っています。

学習の場として活用されているほか、漢籍は様々な学問分野においても研究資料となるため、他学科・他部局・学外の学生や研究者にも利用されています。

中国思想文化学、中国語中国文学、東洋史学、韓国朝鮮文化、インド哲学仏教学、言語学の6研究室が所有・購入する漢籍(一部日本・朝鮮関係資料などを含む)を受け入れており、孤本・稀覯本など多数の貴重な資料や、小倉文庫(朝鮮語資料・朝鮮漢籍)・瀧田文庫(日本禅籍)といったコレクションを合わせると、10万冊を超える書籍を所蔵しています。

目録データの電子化については、近年着実にOPACへの遡及入力が進んでおり、ほぼ全ての遡及入力が完了しています。これら環境整備の進展によって学内のみならず学外からも利用の便が増し、利用者数も年々増加傾向にあります。

漢籍を伝統的な四部分類法で配架した「書庫」、貴重書を保管する「貴重書庫」、および参考図書・利用者用PC・複写機を備えた「閲覧室」で構成されています。主に本学部の中国学専攻者に教育・研究・

毎年継続的に図書を受け入れており、関連研究室の購入図書や科研費購入図書を中心に、年間1,000冊程度のペースで蔵書が増えています。これほどの量と質を備えた漢籍専門図書室を学部内に持つのは全国でも稀であり、明治以来の中国学の伝統を継承しつつアジア研究に力を入れてきた本学部ならではの施設といえます。

文学部は明治10年の発足以来、時代に即した使命と在り方を問い、わが国の人文学教育を牽引してきました。140年を超える長い歴史は、幅広い分野にわたる優れた研究の成果と、各界における卒業生たちの活躍に彩られています。先人の功績を伝統として受け継ぎ、進取果敢に革新へと挑む文学部の気風がいかにして生まれたのか。日本の近代化とともに歩み始めた創成期から、現代に至る軌跡の中に、その答えがあります。

最初の東京大学文学部

東京大学文学部は、1877年4月、東京大学と共に誕生した。東京大学は東京開成学校と東京医学校の合併により法・理・文・医の4学部で発足し、医を除く3学部の総理には東京開成学校総理であった加藤弘之が就任した。東京開成学校は9月入学で東京大学もそれを引き継いだため、法・理両学部は東京開成学校の関連する学科を改編して発足当初から授業を行ったが、引き継ぐべき学科がなかった文学部の実質的な発足は9月となった。文学部専任の教授は外山正一と2人の米国人で、ミシガン大学で学んだ外山も含め、英語で授業した。

文学部は4年制で、史学・哲学・政治学を学ぶ第一科と、和漢文学を学ぶ第二科が置かれた。東京大学予備門から進学する際に科を選び、4年生は専修科目を選んで卒業論文を書く。しかし、当初は和漢文学の教授は不在で、85年までの東京大学時代の卒業生で和漢文学を専修した人は2人しかいない。予備門の前身は東京英語学校であり、欧米の学問を学びたい学生が集まっていたのである。授業は一部に選択の余地はあったが、学年ごとに定められた科目を受講し、第一科の学生も大学卒業生にふさわしい文章力を身につけるため3年次まで和漢文学を学んだ。当初は転学部者を含めて2年生までしかいなかったのが、政治学、理財学 (political economy) の教員は翌年度の授業開始前に、後に哲学、美学も教えるフェノロサ教授が着任するまで不在であった。彼の着任後、史学は教員の適任者が得難く、希望する学生が少なくして専修科目から除かれ、代わりに理財学が加えられた。

1879年から科外で仏書講義が行われ、81年からは和漢学の教員も教授に任じられるなど、欧米学問以外の教育体制の強化も図られ、85年には加藤総理の建議により古典学講習科を置いて別途学生を募集し、専門教育を行なった。しかし81年に文学部長となった外山は古典学講習科には反対であったといい、臨時的措置にとどまった。

帝国大学文科大学の発足

1886年3月、東京大学は工部省や司法省が設けていた学校を合併して帝国大学に改編された。文学部はその下の分科大学の一つ、文科大学となったが、政治学及理財学科は法科大学へ編入された。東京大学文学部時代の卒業生47名のうち35名までは政治学が理財学を専修していたので、この分野を切り離れた文科大学は、改めて担うべき

「文」の学問を編成しなくてはならなかった。

文科大学の発足時には、従来の哲学、和文学、漢文学に博言 (のちに言語) 学を加えた4学科であったが、数年のうちに史学、英吉利文学、独逸文学、仏蘭西文学の各学科を開設し、また政府の直轄で行われていた歴史編纂事業の移管を受けて文科大学臨時編年史編纂掛 (現在の史料編纂所の前身) とし、その幹部を教授とする国史科を置いた。これら各学科の学生が卒業するようになった1893年、文科大学発足8年目にしてはじめて卒業生が10名を超える。その1人が夏目漱石であった。

帝国大学に入学する学生は、第一高等中学校をはじめとする高等中学で学び、それを前提に文科大学は東京大学文学部より1年短い3年制とされた。生徒は高等中学の予科から2年制の本科に進むとき、

希望する分科大学を決めたから、文科大学の体制整備が入学者に反映するには時差があった。その後、第一高等中学の後身である第一高等学校は1895年の入試規則で、文科大学進学希望者の入学枠を設けた。このように高等学校の入学試験で文科大学進学者が確保され、各地の高等学校が整備されたことにもなって、日露戦争ころには、文科大学の毎年の入学者が百名程度まで増加した。

井上哲次郎の挑戦

文科大学とそこで教授すべき諸学問の発展を見て、東京大学文学部最初の卒業生の1人であった井上哲次郎文科大学長は学生の選択の自由を大きくする改革を提案した。従来の学年末試験に合格しないと落第する方式をやめ、修学年限を3学年以上とし、入学時には、哲・史・文の3学科のいずれかに属し、勉学を進めた後に19の受験学科から一つを選び卒業試験を受けるという方式である。彼が6年あまり留学したドイツの大学の制度に近い。「学科」が重なって紛らわしいが、井上が全学の評議会に決裁を求めた書類では、入学時に選ぶのは「学部」とされていた。



第二代文学部長 井上哲次郎



明治30年頃の東京帝国大学。正門から望む。

例えば文科大学哲学部に属し、印度哲学科を卒業という形である。しかし、他の分科大学にない「学部」の使用は許されず、3学科となった。

選択の自由を認めたとて、学生への要求水準が低いわけではなかった。卒業には受験学科の定める必修科目を履修し、2か国語の語学試験に合格した上で卒業論文を提出して審査を受ける必要があった。語学試験では、国史や国文を専攻する学生も英独仏のうち2か国語が必須である。この制度は日露戦争中の1904年9月から在学学生も含めて適用されたが、試験の廃止を良いことにろくに出席せずに履修の認定を求める学生や、なかなか卒業できない学生がいるとして不評となり、6年後に廃止された。1904年の入学者を追跡すると3年後に卒業した者は半数に満たず、2名は7年かけて卒業したことを確認できる。

このような大胆な試みが可能であったのは、当時の帝国大学で各分科大学の自立性が大きく認められていたからである。理・工科大学は3年制を続けていたが、法科は1898年から1914年まで4年制をとっており、文科が3年にこだわる必要はなかった。文科大学は、1910年には各年の最低履修科目数を定めることで3年修学を原則とし、受験学科を専修学科と改めて、入学時2年次開始前に決める制度とした。語学の要求は緩和されたので、この制度変更は卒業生の水準の向上を目指したものではなかったようだ。

い学科について入学試験が行われ、この比率は3割程度に低下した。

日中戦争期になるとこの比率は再び上昇し、39年入学者から英吉利文学が減少した後は、国文学と国史学が上位となった。1941年から修業年限の短縮が始まり、1943年10月には従来大学生に認められていた徴兵延期が停止された。これにより在学学生の多くが大学を去って軍務に服し、少なくとも269名が戦没した。ほぼ当時の1学年の学生数にあたる。また、大学に残った学生も勤労働員されて、授業はほとんど行われなくなった。

新制東京大学文学部の発足と変容

東京帝国大学は空襲被害を受けなかったため、敗戦直後の1945年9月には授業を再開し、翌年からは女子にも門戸を開いた入学試験を行なった。哲・史・文の3学科に戻してこの単位で入学させ、従来の学科を専修と改めたが、これは、勉学の機会が乏しかった多様な学生に入学後に専攻を考えさせるためであったろう。

1949年に東京帝国大学が新制大学としての東京大学に改編されると、文学部は再び専修を学科と改め、19学科制をとる。そして1951年に教養学部からの進学者を迎え、2年制の文学部教育が始まった。旧制の3年に比べ、履修が必要な単位は減らされたが、1年あたりでは2割程度増している。

1950年には史料編纂所が文学部所属から東京大学の附置研究所に昇格し、1951年には教育学部の新設により、教育学科が廃止された。概ね新制に移行した1955,56両年度の卒業生を見ると、上位3専攻への集中率は4割、卒業生数が多いのは英吉利文学、仏蘭西文学、社会学であり、時代の変化が窺える。

東京帝国大学は毎年卒業生の現職の調査を行っていたが、それによれば1900年、1920年ともに有職者の83%が学校教職員で、教育・研究の職に就くのが原則であった。1940年にはその比率が70%にまで低下し

てはいるが、銀行・会社員が4.6%で新聞雑誌記者の5.3%に及ばないなど、文学部の専門性を生かした就職が普通であった。しかし、戦後は従来通り教育・研究職を希望する学生が存在すると同時に、就職の希望分野や、学部教育への期待が多様化した。その中で1960年代後半に激化した大学紛争も含め、学生、教員ともに文学部のありかたを模索し続けてきた。

文学部の最初の卒業生から課されていた卒業論文は、様々な議論の末、学科によっては1962年の卒業生から特別演習で代えることができるようになった。そして翌年度から、学科を専修課程に改め、四つの類に区分し、このうち文化学の第一類と語学文学の第三類では専修課程に属さない類卒が認められた。学問の性格の違いから、統一的にならないのが文学部らしい。この時、西洋近代語近代文学、西洋古典学が新たに専修課程となり、その後も、類の区分に合わせた専修の分化や、ロシア、イタリアの語学文学、社会心理学、イスラム学の開設、また改称・改編など学問の発展や時代状況に合わせた対応が重ねられて来た。1995年には第一類を思想文化学科、第二類を歴史文化学科、第三類を言語文化学科、第四類を行動文化学科として類卒を廃止し、2016年には1学科制となった。

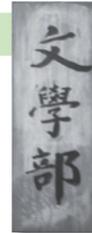
文責：鈴木 淳 (日本史学)

文学部の再登場と戦時期

1919年4月、高等教育制度の改革に伴い、文科大学は文学部に名称を変えた。21年には4月入学となる。文学部は3学科を廃止し、従来の専修学科を学科として19学科となった。この単位を研究室と呼ぶことが一般化し、1929年には2年続けて演習を履修することが卒業の要件になるなど、現在伝統的と思われる文学部の体制はこのころまでに固まった。

1919年には高等学校も改革され、帝国大学進学を前提に、学部を問わない「文科」として学ぶようになった。これにより、文学部には、第一志望者のほか、例えば法学部が第一志望だが定員を超過して試験が行われたため文学部進学を余儀なくされた学生も入学することになった。

日露戦争後には、卒業生の多い受験学科3学科の卒業生が全卒業生の4割弱で年による上位学科の変化も大きかったが、大正期には英吉利文学科・国文学科を上位の常連として4割台の半ばとなっていた。そして、文学部移行後の入学者では、この両学科と哲学科、社会学科を中心に5割を超えるようになった。そこで、1925年から希望者が多



文学部生は、どんなキャンパスライフを過ごしているのだろう？
授業以外の時間は、どこで何をしているのだろう？という疑問にお答えしましょう。
朝から夕方まで、とある文学部生の一日の過ごし方を時系列で追ってみました。
構内の休憩スポットや学食のイチオシメニュー等もご紹介します！

9:30 朝の授業準備

文学部の自習スペース、三友館で友達と待ち合わせ。
図書館では話せる場所が少ないので、相談しながらの勉強に便利。



三友館は、文学部の学生・院生が勉強や交友に自由に使えるスペースとして、大教室を改修して作られました。三友館という名は、「直きを友とし、諒あるを友とし、多聞なるを友とすれば、益あらん」という『論語』の言葉に因んでいます。ロッカールームも兼ねたホワイエ、パソコンが使える静かな自習室、ホワイトボードや移動式の机を備えたディスカッションルームの3つの空間からなる、文学部生専用の広々としたスペースです。



10:25 講義

階段講義室で授業。少人数授業の多い文学部だが、大教室での講義も迫力があって引きこまれる。



12:15 ランチ

文学部の地下にある银杏メトロ食堂で友達と昼食。畳の上でゆっくり過ごす憩いの時間。手頃な価格が嬉しい。



“メトロ”のイチオシメニュー!!

银杏メトロ食堂では、お昼は「選べる定食」が1番の人気メニュー。ずらっと並んだ日替わりのおかずと副菜から好きなものを選びます。その日の気分で量と献立をカスタマイズできるのが人気の理由。そのほか、注文を受けてから1つ1つ卵でとじられるカツ丼や親子丼もオススメです。



12:40 研究室でのひととき

研究室で演習の調べ物。お茶を飲んで先輩と話していると、いい本を教えてもらう。文学部生は、研究テーマはまちまちだが、不思議な連帯感がある。



13:00 実習授業

午後の授業では人文学のプログラミング実習。自分でプログラムを書いてデータ処理できると、研究の幅が広がります。



「文学部」での勉強は「ひたすら本を読む」というイメージが強いでしょうか。でも、そんなことは全くありません。プログラミングをする人もいれば、フィールドワークでアクティブに動き回る人だっています。中には、理系学部のように実験三昧の毎日を送っている人も！もちろん、心ゆくまでテキストと向き合えるのも文学部ならではの。その研究の幅広さ、各々がやりたいことに対する懐の深さが、文学部の魅力の一つと言えるかもしれません。

15:00 ひとやすみ

ちょっと疲れたので、文学部図書室の閲覧室「布文館」で考えごとをする。窓際の席から見渡す三郎池の濃い緑が心に沁みる。



16:35 演習室へ移動

迷宮のような廊下を歩いて演習室に向かう。各研究室前の色々なテーマの講演会の貼り紙を見るとワクワクする。



文学部の階段にある石像

考古学研究室所蔵の、八〜九世紀のヴィシュヌ像で、インド・エレファンタ島で発掘されました。下はタイ出土の仏像頭部。各階の踊り場に佇む石像達は文学部の不思議スポットとなっています。



16:50 少人数の演習(ゼミ)

原典講読の演習では本、本、本を引きながら、いろんな解釈の可能性を議論する。テキストの前には人は平等。予習して発言すれば、先生は一人の研究者として扱ってくれる。



■文学部の建物と関東大震災

東京大学文学部は神田錦町の現在学生会館があるあたりで発足し、1884年、本郷の現在の法文2号館のあたりに落成した法学部と共用の建物に移った。その後、1910年に現在の法文1号館の位置の理科大学の建物を引き継ぎ、これもあわせて法学部とともに使用した。文学部の使用した範囲は現在と大差ない。そして、現在文学部が一部を使用している赤門総合研究棟の位置には文学部史料編纂掛が所在していた。

しかし、1923年9月1日の関東大震災で、現在史料編纂所のあるあたりの医学部医化学教室から出火した火災により、図書館とともに、文学部の二つの建物は全焼した。図書館に近かった本館の独逸文学、社会学、美術史研究室からは何も搬出できなかったが、国語国文学など北寄りの研究室や八角講堂に続いた建物にあった史学、宗教学、哲学の研究室からは居合わせた学生や、第一高等学校の生徒たちによってかなりの本が搬出されて火災を免れたという。授業は11月に開始され、文学部は医学部に間借りし、あるいは東京美術学校(現:東京芸術大学)の教室を借用した。延焼を免れた史料編纂掛の建物は、後に小石川植物園に移築されて現存し、その煉瓦造書庫はレストランに改造されながら赤門近くに今も残る。焼失した建物の跡に、震災復興のため建てられたのが現在の法文1・2号館である。



文責:鈴木 淳(日本史学)

焼失した旧本館

美術史学 専修課程 4年 氷見野夏子さん



「なぜ文学部を志望したのだろう？」
「その研究テーマを選んだ理由は
何だろう？」
「文学部で学ぶことの楽しさは
どこにあるのだろう？」

専修課程で古代ローマ美術の魅力を知る

小さい頃から絵を見たり描いたりするのが大好きで、一時期は美大を志望していました。最終的に実作ではなく研究の道を選択しましたが、東大へ入学した時点で文学部へ進むことを決めていたわけではありません。前期課程(教養学部)で、さまざまな科目を学ぶうちに、やっぱり美術しかないという自分の気持ちがはっきりして、文学部美術史学専修課程を志望しました。自分のやりたいことが明確に決まっていなくても、必ず打ち込める対象に出会えるのが東大のいいところだと思います。

いま、私が専門に研究している古代ローマの美術も、専修課程に進んでから面白さに気付いて研究テーマとして選びました。古代ローマの絵画は、植物の葉や影まで細密に描かれているのに、奥行き表現がないため、写実的に見えない不思議さがあります。住宅の壁に描かれているものが多く、日本ではなかなか実物を見る機会がないため、卒論のためにローマと上海に展覧会を見に行きました。作品と直に向き合うことは、自分が古代ローマの絵画に惹かれる理由を解明することに繋がるんですね。

幅広い視野と体験が新たな発見を生む

専修課程で学ぶ前に気がかりだったのは、専門性の高い限られた分野について研究するために、自分の視野が狭くなってしまうことです。でも、それは私の思い違いでした。美術史学専修課程で学ぶ中で、限られた対象を追求するには、幅広い興味と視野が求められることを知りました。古代ローマの美術も、後世の西洋美術や東洋美術と比較すれば、今までと違う新しい視点から眺められます。自分が興味をもって

追求するテーマが固まったことで、今までバラバラだった知識がひとつに繋がっていくのです。よく友人と小旅行を兼ねて地方の美術館や展覧会に行きますが、奈良で見た信貴山縁起絵巻も、京都で見た禅宗の美も、新たな発見をもたらしてくれます。

3年次の冬に英国で実施された「文学部冬期特別プログラム」に参加したことも、貴重な経験でした。これは、文学部と英国のセインズベリー日本藝術研究所が連携して行う約2週間のプログラムです。発掘が進められているマストファーム遺跡で調査の様子を間近に見たこと、大英博物館で古代ローマよりさらに古い先史時代の遺跡に触れたことが最大の収穫でした。

真の価値を問い続けるために大学院へ

文学部には個性的な人が多く、同期や先輩からも刺激を受けています。専門外の話題についても、ここに面白さがあるのか!と理解するようになりまし。これは、洋の東西や時代を越えて幅広い知識と視野を備えた先生方の影響が大きいと思います。私が大学院へ進むことを決意したのも、先生にお借りした一冊の本がきっかけでした。イタリア語で書かれた美術の専門書を3年の冬休みに苦勞しながら読破して、もっと勉強したい、研究を続けたいという気持ちが大きく膨らんだのです。

少し前までは、文学部で自分の好きな研究をしても実社会の役には立たないかもしれないと考えていました。でも今は、研究を通じ人類の普遍的な価値は何かを考えることが、人が何を目指して行動すべきか迷った時の羅針盤を作るのではないかと考えています。

文学部での学びは、そういう形で社会に貢献しうると信じています。



文学部冬期プログラム中、ロンドン街歩き



ゼミの研修旅行:
絵巻の舞台を訪ねて信貴山中で



京都・奈良日帰り旅行:
猿沢池前で

美術史

氷見野夏子さんの
時間割
(*3年次)

	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.
1	—	—	—	—	—
2	英語	ルネサンス美術の世界	中国絵画史	—	—
3	中近世ドイツ美術史	博物館展示論	—	—	—
4	—	—	—	1800年頃のドイツ美術	—
5	—	美術史の再考	絵巻ゼミ	ヨーロッパ建築文化論	イタリア語初級
6	博物館教育論	—	絵巻ゼミ	—	—

東大文学部生がその問いに答え、日々の学びを通じて獲得したもの、成長する糧となった体験について語ります。自由で、学生の自主性を重んじる文学部の環境の中で、自ら選んだ道に進進する二人の声をご紹介します。

フランス語 フランス文学 専修課程 4年 渡邊昂太さん



入学前に研究したいテーマを決めていた

私は早い時期から、大学の仏文へ進もうと固く決意していました。それは、モーリス・ブランショという作家に魅せられてしまったからです。分厚い本を読破することがカッコイイと思っていた私は、フロイトの精神分析から始まり、中学から高校にかけて思想・哲学関係の本を読みあさっていました。その中の一冊、ラカンについて書かれた本にブランショの引用があり、衝撃を受けたのが運命の出会いです。ブランショは現代思想の潮流において高く評価されているので、哲学からアプローチする方法もあります。でも、私は第一に彼の語りが好きで、とにかくテキストと向き合う方が性に合っていると思い、仏文を選んだのです。

学びながら進む道を選ぶのが東大の特色なので、私のように入学前から絶対にこれがやりたい、という明確なテーマを持っている学生は少数派かもしれません。そこまでストイックな覚悟がなくて、ただ漠然と本を読むのが好きだ、という人でも文学部で学ぶうちに必ず面白みが見つかるはず。学生が好きで研究したいと望む対象について、否定されずに受け入れてもらえる自由な風土と環境が、東大文学部のいいところだと思います。

留学生活で身に付いたグローバルな「度胸」

大学生活で最も楽しく、刺激的だった経験がスイスのジュネーブ大学へ留学したことです。2015年の9月から翌年の7月まで、現地の学生と机を並べて同じ授業を受けました。当然、授業は全てフランス語なので、わからない単語を耳にするたびに辞書で引ながらの聴講です。

留学生活の最も大きな収穫は、語学力や知識よりもヨーロッパ的な

コミュニケーションに必要な反射神経が鍛えられたこと。日本で身につけるのは難しい「度胸」。いい意味での「ずぶとさ」です。トラブルもありましたが、日本に帰りたくない、このまま留学したいと心から思いました。友人たちを部屋に呼んで、夜通しポーカーをしたり、年末に年越しソバを作ってふるまったり、日本にいるよりアクティブなキャンパスライフを満喫していたからです。本を読む時間が十分にあったので、卒論の準備を進められたのも留学の成果といえるでしょう。

大切なのは価値を見出し、提示する力

留学中にフランス語を母国語とする学生たちと交流するなかで、今の自分には到達できない領域を感じて劣等感を抱くこともあり。でも、文学という共通言語を通して向き合えば、対等に自分なりの考えや見方を伝えることができます。大学で先生や先輩と議論していても、自分が発言したことに価値があれば認めてもらえる。それは、自信に繋がっていきます。こうしたプロセスは文学部の研究に限らず、会社で仕事をする際にも応用できるでしょう。文学部の学びは、対象の普遍的な価値を見出し、提示する力を鍛えるからです。だから好きなことの研究が役に立つ、立たないという問いに意味はないと思います。

とはいえ、日々難解な文学談義に明け暮れているわけではありません。仏文研究室はとてもフランクで合宿や飲み会が盛んです。国内外の研究者を招いたシンポジウムも頻りに開催されるので、触発される機会にも恵まれています。

ブランショはあまり人気がないため、その価値を広く世に知らしめたい。大学院へ進んで研究を重ね、納得できる修士論文を仕上げたいと考えています。

仏文

渡邊昂太さんの
時間割
(*3年次)

	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.
1	—	—	—	—	—
2	20世紀フランス詩	文学理論	19世紀フランス詩	フランス語会話	神話学
3	—	シュルレアリスム小説	20世紀フランス映画	古仏語	20世紀フランス日記文学
4	19世紀フランス日記文学	—	日本文学『小説』史	フランス語学	19世紀フランス幻想小説
5	—	—	—	—	—
6	—	—	—	—	—



レマン湖:ジュネーブの象徴です。友人に誘われて湖岸をよく散歩しました。



アルプス:留学中の旅行で訪れました。日本にはないスケールに痺れます。



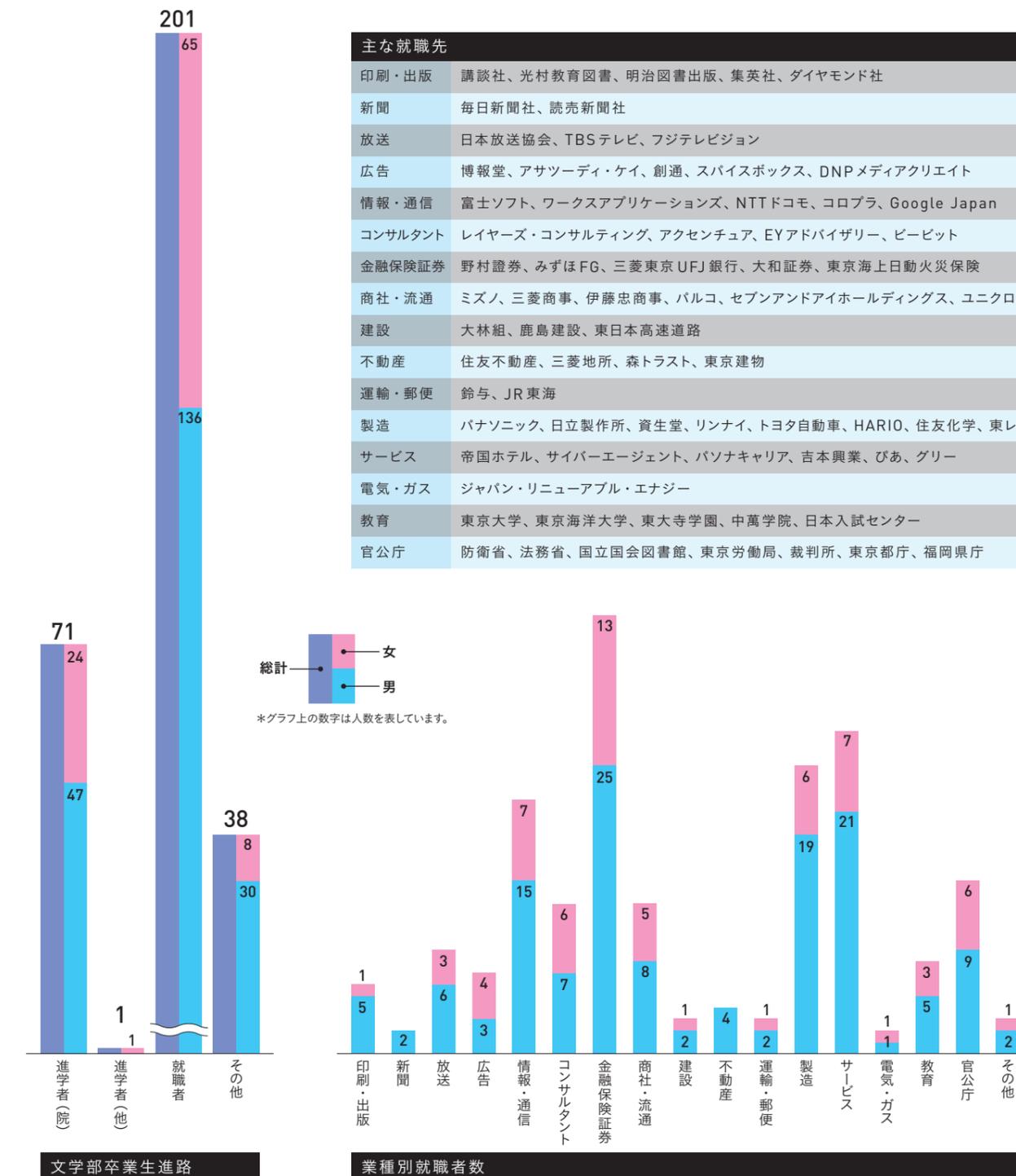
勉強:目下らめっこを続けている相手です。本面に面白いんですよ!



息抜き:エンタメも好き嫌いせずには嗜みます。この作品は何度観たか分かりません。

文学部卒業後の進路は、大学院に進むか、教員になるしかないと思っているなら、それは大きな誤解です。卒業生たちは、マスコミをはじめ金融、メーカー、ICT関連、官公庁など、幅広い分野で活躍しています。先輩たちが選んだ進路と、その理由について、データから読み解いてみましょう。

東京大学文学部 平成28年3月卒業生の進路



主な就職先	
印刷・出版	講談社、光村教育図書、明治図書出版、集英社、ダイヤモンド社
新聞	毎日新聞社、読売新聞社
放送	日本放送協会、TBSテレビ、フジテレビジョン
広告	博報堂、アサツーディ・ケイ、創通、スパイスボックス、DNPメディアクリエイト
情報・通信	富士ソフト、ワークスアプリケーションズ、NTTドコモ、コロプラ、Google Japan
コンサルタント	レイヤーズ・コンサルティング、アクセンチュア、EYアドバイザリー、ピービット
金融保険証券	野村證券、みずほFG、三菱東京UFJ銀行、大和証券、東京海上日動火災保険
商社・流通	ミズノ、三菱商事、伊藤忠商事、バルコ、セブンアンドアイホールディングス、ユニクロ
建設	大林組、鹿島建設、東日本高速道路
不動産	住友不動産、三菱地所、森トラスト、東京建物
運輸・郵便	鈴与、JR東海
製造	パナソニック、日立製作所、資生堂、リンナイ、トヨタ自動車、HARIO、住友化学、東レ
サービス	帝国ホテル、サイバーエージェント、パソナキャリア、吉本興業、びあ、グリー
電気・ガス	ジャパン・リニューアブル・エナジー
教育	東京大学、東京海洋大学、東大寺学園、中萬学院、日本入試センター
官公庁	防衛省、法務省、国立国会図書館、東京労働局、裁判所、東京都庁、福岡県庁

先輩たちの道程 卒業生インタビュー



多士済々の文学部卒業生の中でも、ひととき個性を放つ4人のロングインタビューをWEBに掲載しています。先輩たちが文学部で学んだこと、恩師や学友から受けた影響、卒業後にどのような過程を経て今に至ったのか。ぜひ読んで進路選択の参考にしてください。

WEBはこちらから ▶ <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/interview/index.html> スマホはこちらから ▲



野放し状態で「もの見方を学ぶ」
森下 佳子さん シナリオライター

1994年 東京大学文学部宗教学・宗教史学専修課程卒業。株式会社リクルートに勤務のち、2000年『平成夫婦茶碗〜ドケチの花道』で連続ドラマ初執筆。代表作に『世界の中心で、愛を叫ぶ』『白夜行』『JIN』『ごちそうさん』など。第22回橋田賞、第32回向田邦子賞受賞。2017年度NHK大河ドラマ『おんな城主 直虎』の脚本を担当。



人間のありようとして美を求める
前田 恭二さん 読売新聞東京本社文化部長

1987年 東京大学文学部美術史学専修課程を卒業し、読売新聞社入社。主に文化部で美術を担当。著書に『やさしく読み解く日本絵画』(2003年、新潮社・とんぼの本)、『絵のように 明治美術と文学』(2014年、白水社) (2015年芸術選奨新人賞を受賞)。



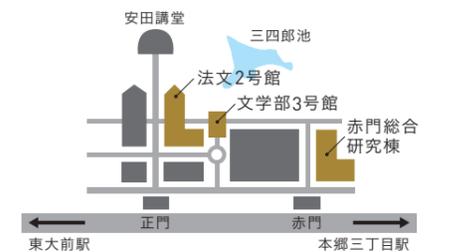
自分がやりたいことをちゃんとやろう
佐治 ゆかりさん 郡山市立美術館長

1982年 東北大学文学部東洋日本美術史学科卒業。2002年 東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学専攻・前期課程修了。2006年 同後期課程修了。2010年 博士号(文学)取得。1983年4月～2012年3月 福島県立美術館 学芸員として勤務。2012年4月 郡山市立美術館長に就任。



乱世にこそ文学部へ!
内田 樹さん 凱風館館長

1975年 東京大学文学部フランス語フランス文学専修課程卒業。1982年 東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程中退。1982年 東京都立大学人文学部助手、1990年 神戸女学院大学助教授、1996年～2011年 神戸女学院大学教授。2011年～昭和大学理事。2015年～京都精華大学客員教授、神戸常盤大学客員教授。



表紙写真：夜の法文2号館。南側から望む。(撮影：斉藤 真美)
発行：東京大学文学部広報委員会 / 問い合わせ先：文学部総務チーム e-mail: shomu@l.u-tokyo.ac.jp <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/>